569-137
1200501517275
569
137

新纂 俳句大全

秋之部

569-137

新纂 俳句大全 秋の部

秋之部

符號⊙＝天文、地理、氣候。●＝人事。□＝動物。△＝植物。

い（ゐ）

⊙稲妻 七 十六夜 二九 居待月 三〇
鰯雲 四〇
●生身魂 一五〇
□稲雀 二四八 色鳥 二六一 鰯 二六七
鰯引 二六九 籠馬 二九五 蠡 三〇三
稲の虫 三二三 芋虫 三二四 色かへぬ松 三三四
銀杏紅葉 三三八 銀杏落葉 三三八 銀杏の實 三三九
毬栗 三五三 無花果 三六〇 芋 四四一
稲 四四六 稲の花 四四七 稲穂 四四七
稲筵 四四八 稲刈 四四八 稲扱 四四八
稲垣 四五〇 稲塚 四五〇 稲城 四五〇

ろは

●六道詣 一四三 六齊 一四三
⊙初嵐 六 初月 一四 二十日月 三〇
花野 六六 初汐 七七 葉月潮 八〇
八月 八二 葉月 八二 初秋 八九
八朔 一〇六 肌寒 一〇九 晩秋 三三

●蓮飯　一四七
初獵　一七七
番船　一九二
□初鷹　二三〇
蜈蚣　二〇四
△櫨紅葉　三二七
萩　三六六
敗荷　四三六
初昔　四六六

に

◎二十六夜　二四
●庭の立琴　二三五

ほ

◎星月夜　四
●星祭　二二一
星迎　二三三
星契　二三三
星雨　二三四
墓参　二四九
牡丹根分　二〇一
□頬白　二四九
△菩提子　二二一
鳳仙花　二七九
千煙草　四二三
□蛇入穴　二六三
△糸瓜　四五七

へ

海嘗打　一六八
鳩吹　一七七
鐵根堀　二〇四
鰤　二七二
機織虫　二二三
初紅葉　三二九
芭蕉　四二三
蓮實飛ぶ　四四五
二百十日　一〇五
盆の月　二三
盆波　八〇
星合　二二一
星今宵　二三二
星別　二三三
星使　二三四
盆市　二四四
放生會　二六二
于綿　二七二
鯨　二七七
木瓜の實　二四一
螢草　四〇一
牡丹の芽　四一八
放屁虫　二二三
紅芋　四六七

花火　一七〇
鳩笛　一七八
走り蕎麥　二二二
鯊　二七四
柞　二二五
葉鶏頭　四二二
薏苡　四四六
干柿　二四九
穂蓼　四〇四
鬼灯　四三六

と

●道元忌　一二九
橡園子　二〇一
□鳥屋勝　二二一
△橡の實　二四〇
蕃椒　四三九
◎仲秋　九一
●地藏祭　一四三
□茶立虫　二〇一
◎立秋　八三

り

△龍膽　四〇一
△零餘子　四四三
□瑠璃鳥　二四九

ぬ

◎落し水　七四

る

お（を）

●鬼貫忌　一二八
麻柯箸　一四七
狼祭獸　二二〇
□落鮎　二七〇
△女郎花　二七七
萬年青　四一八
晩稲　四五〇
●綿取　一九一
忘扇　二〇九
△吾亦紅　四〇一
◎刈田　七三

わ

か

燈籠　一五四
木賊刈　二〇一
蜻蛉　二〇四
團栗　二五四
冬瓜　四五七
重陽　一六六
立秋　八三
地藏菩薩　一七六
送火　一四六
踊　一五八
尾越鴨　二六三
孕殼　一四七
扇置く　二〇六
男郎花　二七九
尾花　四二八
落穂　四五〇
綿つみ　一九一
忘團扇　二二一
若煙草　四二三
白粉花　四〇二
荻　四二九
綿買　一九二
□渡鳥　二五七

鳥威し　一八五
濁酒　二二七
蟷螂　二二一
十日菊　二九〇
毒茸　四六七
地芝居　一七六

●神嘗祭　二三六
鵲の橋　二三七
門茶　二五三
蚊帳名殘　二二三
□雁　二三六
懸巢　二六三
△柿紅葉　三三六
柿　三四三
雁來紅　四二三
掛稻　四四九
茅茸　四六七
⊙宵の秋　九九
夜寒　二二三
⊙立田姫　七〇
●七夕　二二九
魂送　二四七
棚經　二四八
高きに上る　二六八
□鷹山別　二三二
玉虫　三二一
△竹の春　三六三
蓼の花　四〇三
唐黍　四五五
茸狩　四六五

貸小袖　二三五
神田祭　二三八
案山子　二八三
蚊帳果　二二三
雁の棹　二四三
河鹿　二六四
樫の實　三四〇
柑子　三五九
かまつか　四二三
南瓜　四五八
烏瓜　四六〇
夜長　二〇二
夜半の秋　二〇二
太祇忌　二二九
靈祭　二四七
大文字　二五〇
竹床几　二七〇
太刀魚　二七四
樽柿　三四九
竹伐　三六四
煙草　四二二
種瓢　四五七

梶の葉　二三六
門火　二四六
蜩の別れ　二二二
鹿火屋　三二八
樞鳥　二六三
かな〳〵　二八七
榧の實　三四〇
懸煙草　四二二
貝割菜　四三九
烏瓜　四六〇
魂待　二四七
魂棚　二四八
高燈籠　二五六
大根蒔　二〇四
蜻釣　二七八
檀特花　三八二
煙草花　四二三
茸狩　四六三

⊙冷雨　二一七
⊙そゞろ寒　二〇八
●送行　二四七
△蕎麥の花　四〇五
⊙月今宵　二二
露　五〇
露霜　五六
●机洗　二三六
□燕歸る　二六二
△蔓梅　三三五
椿の實　三四〇
露草　四〇〇
●願絲　二三四
△合歡の實　三四一
⊙名殘月　三三
⊙鳴子　二八五
△檜紅葉　三三八
七草　四二二
△蘭　三九七
⊙無月　二八
●迎火　二四五
□椋鳥　二五二
虫合　二九三
⊙うそ寒　二〇八

走馬燈　二五七
月見　二三
露時雨　五五
つめたし　二二七
つと入　二六二
蛸螢　二八四
つるもどき　三三六
つまくれなゐ　三八二
蔦　四二七
摘菜　四三九
長月　八三
鳴竿　二八九
梨　三五六
草　四二一
月　二八
虫送　二八〇
虫選　二九三
虫　二八七

●牛祭　一三七
鰻　藥　一九九
□鶏　二五三
△梅　嫩　三三四
○薄紅葉　三三九
●野の宮別　一六三
後の彼岸　一六五
□殘る蚊　二七九
○九月　八三
●蜘蛛の糸　二三五
扇　藥　一九九
□草　莖　二四六
△常山の花　三三四
熊の栗飯　三五四
葛　三七六
草紅葉　四三一
○やゝ寒　一〇七
●夜　學　一六九
□山　雀　二三一
△柳散る　三三七
○待　宵　一七
●桝の市　三七
△松　毬　三三四

孟蘭盆　一四四
團扇置　二一〇
馬　追　二〇二
漆紅葉　三三六
末　枯　四三三
野　分　六〇
後の蘆入　一六四
野　菊　三九二
暮の秋　二一〇
草　市　一四四
蘭　堀　二〇二
下り鮎　二七三
栗　飯　三五一
九年母　三五九
茱　萸　四一七
草の實　四四四
燒　米　二〇〇
燒　扇　二〇九
燒　栗　三五三
破芭蕉　四一六
摩陀羅祭　一三七
松　虫　二九六
曼珠沙華　三八一

漆　掻　一九七
梅紅葉　三三七
野山の錦　六九
後の藪入　一六四
九月盡　二三五
下り藥　一九九
九月蜻蛉　二一三
轡　虫　二〇一
栗　飯　三五四
茱　萸　四一七
松　虫　二九六
槇の實　三四〇

け

間引菜　四三九
○弦　月　一五
●夏書納　一六三
△鷄　頭　四一八
○二日月　一五
冬近し　一二九
●二つ星　二三三
△芙　蓉　三三一
葡萄酒　三六二
○洪　水　八一
●紅葉忌　一四一
駒　迎　一八〇
胡麻刈　二〇四
古　酒　二二六
□小　鷹　二三一
△木の實　三四二
午蒡引　四六三
△槐の花　三三四
●天長節　二三七
△照　葉　三三五

豆　引　四六二
今日の月　二〇
毛　見　一八一

松　茸　四六六
今朝の秋　八五

こ

●二日灸　一六四
△芙　蓉　三三一
佛手柑　三六〇
葡萄酒　三六二
藤の實　三六三
○洪　水　八一
●紅葉忌　一四一
御難餅　一五〇
駒　迎　一八〇
駒　曳　一八一
胡麻刈　二〇四
更　衣　二〇六
古　酒　二二六
□小　鷹　二三一
小　蜂　二九四
△木の實　三四二
小　菜　四五九
午蒡引　四六三
△槐の花　三三四
榎の實　三四一
枝　豆　四六二
●天長節　二三七
定家忌　二三九

ふ

冬近し　一二九
文　月　八三
冬隣　一二九
冬を待つ　一二八

え（ゑ）

て

△照　葉　三三五

あ

○天の川　一
秋日和　三三
秋の雲　三七
秋時雨　四三
秋の月　二七
秋　晴　三三
秋の雨　四〇
秋の霜　四九

秋の山　六五
秋の水　七〇
秋の波　八〇
秋暑し　九三
秋の夕　九八
朝寒　一一〇
秋更　一二〇
秋去　一二二
●秋社日　一二七
秋の雛　一六四
網代打　一九八
茜堀　二〇三
秋團扇　二一〇
□江鮭　二七三
秋の螢　二八一
秋の蝸牛　二八三
亦蜻蛉　二一〇
△甘干　三五〇
朝顔賣　三七六
秋草　四一一
小豆摘　四六三
⊙下り月　二九
●宗祇忌　一三八
□さか鳥　一七九
秋の野　六九
秋の海　七六
秋出水　八一
秋涼し　九四
秋の夜　九九
秋惜　一二五
秋の名殘　一三三
秋盡　一三三
秋祭　一三八
秋の彼岸　一六五
朝茶の湯　一六九
粟飯　二〇〇
秋扇　二〇七
新走　二一五
秋の蝿　二八〇
秋の蜂　二八三
秋の蟬　二八三
通草　三六三
朝顔　三七〇
蘆の花　四〇七
蘆の穂　四〇九
粟の穂　四五三
秋茄子　四六三
殘月　二九
西鶴忌　一三九
猿酒　二一九
秋の川　七〇
秋の汐　八〇
秋に入る　八八
秋の暮　九六
秋の聲　一〇七
秋深　一一〇
秋の名殘　一三三
秋盡　一三三
廂柯箸　一四七
朝茶の湯　一六九
粟飯　二〇〇
秋扇　二〇七
走　二一五
秋の蝿　二八〇
秋の蜂　二八三
秋の蟬　二八三
朝顔　三七〇
蘆の穂　四〇九
粟の穂　四五三
殘暑　九一
鮭　二七三

き

秋刀魚　二七三
△櫻紅葉　三三七
殘菊　三九〇
⊙霧　五六
●乞巧針　一三四
逆の峯入　一六三
菊膾　一六七
砧　一九三
□啄木鳥　二五〇
△桐一葉　三三五
菊　三八三
黍　四五四
⊙行秋　一三三
●茹菱　二〇四
△柚子　三六〇
⊙名月　一七
□眼白　二四六
△茗荷　四〇五
⊙三日月　一五
●三井詣　一四三
□蓑虫　二九七
△蜜柑　三五八
⊙新月　一五
新涼　九四
皂角子　三四一
薩摩芋　四四三
霧雨　六〇
霧時雨　六〇
去來忌　一三九
切籠　一五六
菊節句　一六六
菊合　一六八
行水の名殘　二〇五
蟋蟀　二九九
桐の實　三三七
菊着綿　三九〇
菌　四六四
柘榴　三五七
菊酒　一六七
菊襲　一六八
利酒　二一八
金柏　三五九
桔梗　三九五
菌狩　四六五
柚味噌　二一九
柚の釜　三三一

ゆ

め

み

し

身に入む　一一七
水見舞　一七〇
蚯蚓鳴く　三一四
水引　四〇一
十三夜　三〇
秋氣　一〇七
鼠尾草　四六八
秋天　三八
秋冷　一一七

●秋季皇靈祭二二六
新澁二〇一
新豆腐二三二
□鹿二三四
鳴突二三二
鷓鴣二五七
△椎の實二三九
秋海棠二六四
新芋二四三
新米二四三
松露二四七
⊙冷やか二一六
●引板二八五
□鰯二五五
△楸三三五
稗二四六
⊙百かゞり二三
●文珠會二四二
□百舌鳥二四三
△木犀二二六
紅葉且散二三五
●施餓鬼二四三
□鶴鴿二四八
△梅檀の實二四三

子規忌二四〇
新酒二二三
□鹿二三九
鳴獵二三二
澁鮎二七二
熟柿二四八
紫苑二九〇
紫蘇實二四八
椎茸二四六
菱取二〇三
鴨二五六
日向葵二〇一
瓢二四六
百生瓢簞二四七
木綿取二九一
紅葉鮒二七三
木槿二二八
桃の實二六一
攝待二五一

澁取二〇一
新蕎麥二二三
鳴二三二
四十雀二五二
澁柿二五〇
薑二四八
新藁二四一
しめじ二四七
鯉漬二二三
蜩二八四
穭二四三
百生瓢簞二四七
諸味二二八
紅葉二三〇
紅葉二三〇
糊二四一

●硯洗二二五
捨團扇二二〇
□雀爲蛤二四二
△芒二二二

相撲二七二
鑪二六六
西瓜二六一

捨扇二〇八
鈴虫二九六

新纂

俳句大全 秋之部

現代俳句研究會編

天文

天の川　天の川敵陣下に見ゆるかな　子規

山の濕泉や裸の上の天の川　同

北國の庇は長し天の川　同

天の川穂立の匂ひ空に滿つ　八重櫻

舷の汐の光りや天の川　同

出水落つ野面の空や天の川　同

木戸しめて忍ぶ口なし天の川　青々

野はづれに立ち君淋し天の川　同

山寺や疊の上の天の川　同

隱岐船に荒れ風く夜半や天の川　射石

江の隈の一つ家寢たり天の川　同

賭事の船忍ぶ江や天の川　同

一令を待つ朦朧や天の川　霽月
飛行船逐ふ飛行機や天の川　同
天の川故郷の空に傾きぬ　鳴雪
賤が家の春戸や盥の天の川　竹冷
湖を包む山開くかたや天の川　碧梧桐
天の川霧吹下ろす湖上かな　碧童
天の川高き御堂の足場かな　小波
ねのこ雲銀河を越て流れけり　奇迅
西南を壓す桂や天の川　橡面坊
尾を曳て横切る星や天の川　紫影
天の川既に花なき蓮田かな　水巴
あす晴るゝ空冴々と天の川　乙字
露下る夜干の衣や天の川　不喚樓
鹽竈の松の一木や天の川　素泉
天の川更け行く廓の柳かな　西男
夜嵐を眞帆に出船や天の川　雷死久
濱荻に寄する夜浪や天の川　眞名文

天の川夜陣の幕に風もなき　山梔子
亡國の芒はのびて天の川　柿村
天の川流れて吳楚の山河哉　藍雨
夜を出る魚荷忙し天の川　大我
膨れ來る浪の頭や天の川　弓月
衣手の露うつ庭や天の川　逸夢
天の川矢橋の上を流れけり　眞子
天の川潮來へ渡るしまひ船　百非
夜嵐に楫を枕や天の川　松濤樓
陶工は窯を守りぬ天の川　九品太
漁歌起る十神の闇や天の川　十峯
天の川白芥子に風起ちてより　青奴
夜詣りの人かしましや天の川　裸木
天の川天龍川と十文字　天哉
天の川夕顔棚の眞上かな　狂童
人忍ぶ薄の闇や天の川　春郊
罪抱いて去る人惜む天の川　橙黄子

天の川七星の座を浸しけり　秋子
聖堂の森閑として銀河かな　宿木
天の川椰子の實落す土人哉　紫雪
彗星や四更に淡き天の川　櫻川
砂の丘の上に叢や天の川　青鏡
天の川人からうたを吟じ去る　松圃
夜這星の褌濡れなん天の川　眞臺
天の川葎に探す水棹かな　余子
天の川汲む水銀の如きかな　霧堂
一村は水の底なり天の川　痩梅居
舟すぐる水の光りや星月夜　子規

星月夜

古庭の白菊白し星月夜　同
星月夜一つも星のとばぬ哉　同
偵船の高き櫓や星月夜　碧梧桐
吾庭や椎の覆へる星月夜　同
澤の邊を漁る灯近し星月夜　乙字
星月夜袖に波ちる埠頭かな　同
着船や故山更けたる星月夜　霧刀
鈴鹿越す野武士の群や星月夜　青嵐
星月夜寒山に法の粥啜る　青々
河海相闘ふ濤や星月夜　仙臥
鼈を捕り逃しけり星月夜　初犀
星月夜流人の船を送りけり　胡周
寂寞と城聳へけり星月夜　花叟
鵲の啼く空更けぬ星月夜　村雨
松黑き城の物見や星月夜　秋菊
柿盜む頃とはなりぬ星月夜　仙堂
瑠璃盤に露こぼるゝや星月夜　龍耳
星月夜水の潮來の十二橋　松圃
長谷で見る由井の濱邊や星月夜　梧風
星月夜密獵船を追ひにけり　幽月
祖父を父を奪ひし濤よ星月夜　雉子郎
江の舟に人聲すなり星月夜　峯雪
星月夜衛士の焚く火の赤き哉　碧明

七草に遣り水白し星月夜　玉鬼
大水の引く瀬の音や星月夜　嫩葉
廂深く産室の灯見ゆ天の川　裸木
岩をかむ波の白さや星月夜　梵兒
松明振つて山行勸む星月夜　霧堂

初嵐

一輪の薔薇吹き散りぬ初嵐　子規
富士川の石あらはなり初嵐　同
曉や鐘聞き居れば初嵐　鳴雪
はりまぜの一つ剝げゝり初嵐　蝶衣
空ら鳴りす網干の杭の初嵐　松濱
雨去つて海鮮かに初あらし　守水老
こぼれ菜の叢がり生えぬ初嵐　幾句拙
女駕とめて關所や初嵐　子瓢
朝市の魚の眼涼し初嵐　松濤樓
初嵐一羽の鷹を吹きいだす　撲天鵬
痩畑や五尺の黍に初嵐　塵山
初嵐深山を出づる獸かな　百花蓋
墓原や櫧を枯らす初嵐　碧童
初嵐蜘蛛の古巣の大破かな　一蛙
河原草に山羊追ひだしぬ初嵐　蒼古
初嵐木末の末の薄紅葉　柚翁
初嵐灯火守る橡の内　橡生
竹藪のうしろの湖や初嵐　二星
山の田の漲る水や初嵐　藍雨
足の出る夜着の裾より初嵐　寅日子
よる波や葉山は松に初嵐　虚王
窓もなき壺家計りぞ初嵐　奇志
初嵐ポプラ亂れて帆の見ゆる　凡洲
初嵐芒なびけば馬見ゆる　夜水
初嵐いなの笹原馬でうつ　黄雨

稲妻

稲妻や盥の底の忘れ水　子規
稲妻や三井から見れば瀬田の上　同
稲妻の雲をはなれぬ月夜哉　同
稲妻のして快き夜なるかな　碧梧桐

稲妻や旅して人の戻る夜に　碧梧桐
稲妻や耳なし山の峯はづれ　同
聽衆は稲妻浴びて辻講義　鳴雪
稲妻の苔の胎内くゞりかな　同
稲妻や埠頭に高き神の像　同
床下より忍びの劒や稲光　蝶衣
稲妻にひれ伏す草や汐迫る　同
沼起しに鳴く夜鴉や稲光　八重櫻
井關越す水の白さや稲光　同
稲妻にいくつ消え入る古江哉　藍雨
釣堀の魚の寢る藻に稲妻す　同
けふ張りし障子に宵の稲妻す　虚子
稲妻やどうと浪打つ船の底　五工
稲妻の空に描きし大樹かな　石鼎
稲光り煙草寢させし夜頃哉　碧童
稲妻やうつゝ心の顔を打つ　青々
稲妻や熊うづくまる檻の内　霽月

琴の糸一時に切れて稲妻す　知十
浪被る灘漕ぐ舟や稲光　橡面坊
稲妻や河上暗き竹林　望東
稲妻や波止場の家の生白き　守水老
稲妻や穂黍の中の鳥おどし　たけし
稲妻やはてなき土佐の海の上　波静
稲妻や相模乘切るおしおくり　虚心
山を背の漁村や赫と稲妻す　奇遇
森に見ゆる池のしゞまや天の川　裸木
海の鳴る宿の雨戸や稲光　山梔子
稲妻や小磯によするさゞら波　西男
竈馬とぶ疊の果や稲光　白貧
稲妻や木の丸殿の夜の柝　田士英
稲妻や潮遠くひく闇の音　疊水
降り止みて稲妻走る出水かな　寒山
透垣や稲妻走る椽の先　孤村
外風呂や稲妻光る肩の先　喬嶽

稲妻のかゝれる椎の大樹かな　余子
稲光り芭蕉に折れて芒かな　丹鶏
稲光りしそめて木々の魔風かな　鬼城
出穂日和夜は稲妻の草戸哉　素泉
稲妻や峠を走る小提灯　士櫻
稲妻や牙嚙み鳴らす檻の虎　楓江
稲妻や禁漁の濱を笠一つ　奇山
稲妻や流人の墓に浪頭　霞溪
黄昏や野は稲妻の水淺黄　四子
稲妻のこぼれて清し芋の露　青軒
稲妻や尾上の鐘の風が鳴る　花蓑
辿り着く身延の町や稲光　病董
稲妻に馴れて米とぐ舳かな　未灰
打仕舞ふ砧の上や稲光　野梅
稲妻の雲を引き裂く野末哉　月人
から濠に騒ぐ寢鳥や稲光　華村
鮫人の船遮るや稲びかり　櫻魂子

稲妻の暗に落ち込む最上川　司葉
稲妻を一太刀あびる寢覺哉　花叟
稲妻や早瀬を落す篝師の聲　春湖
鷺も居て蔦沼の雨や稲光　化人
稲妻や劒に似たる山の骨　王瓜子
稲妻に雨戸閉ぢたる女かな　藤谷
稲妻のするどかりける木曾路哉　翠石
稲妻や兒の母を呼ぶ蚊帳の中　雨亭
北は狄羯稲妻燃て雲遠し　へき
稲妻や船よばいする舟夫の顏　飛泉
夜に殘る入道雲や稲妻す　白洋
稲の莖に子を置く虫や稲光　土音
稲妻や波濤遙かに佐渡が島　雨州
稲妻に稲葉の露の青さかな　竹臺
稲妻に京の喧嘩の止にけり　椿堂
稲妻や怪鳥射落す宿直の士　如童子
稲妻の灘乘切るや十挺櫓　朦朧

稲妻に雪洞消しぬ長廊下　玉洲
稲妻に子を抱き直す女かな　雪友
稲妻に眼を射られたる蚊ありけり　白扇郎
稲妻や乾に高う黒き山　晴村
稲妻に鍋の墨掻く手元かな　花溪
稲妻の夜を脱稿や奇人傳　一正子
瀬戸の渦稲妻吸うて鳴りに鳧　刀麓子
稲妻や曳き起したる四手網　秀宇
稲妻の果て戀ふ妹や葡萄棚　晨生
説法の果し廣間や稲光　鑑城
落ち方の月に稲妻する夜かな　清虚
稲妻や築を躍つて魚逸す　烏賊
稲妻や眼先に高き物見臺　翠松
稲妻を一尺流す早瀬かな　澗水
稲妻や水害跡の泥の上　五車
稲妻の光り靜けき夜なり鳧　吟花
稲妻や田中に遠き一軒家　可祝
稲妻や彦根の城の白き壁　醉山人
稲妻に南瓜大きく光りけり　亮三
稲妻や一念込めし鍛冶が槌　金星
稲妻に心見られし男かな　連雀
稲妻も待たれ心の樂寢かな　烏堂
松風に出水の鐘や百かゞり　其石
千仞の瀑に落ちけり百かゞり　磐山
門前の銀杏仰ぐや百かゞり　芳亭
百かゞり納屋と土藏の間かな　竹夭
稲多村や犬の皮剝く盆の月　子規
盆の月見る人の家　嵩雪
債に逃げて盆の月　小波
尻叩く音頭もありて盆の月　別天樓
町中は人の群集や盆の月　泊雲
盆の月燈籠は岸の蔭を流る　菫哉
盆の月や樗良が心に法の影　和風
盆の月草の香殘る市の跡　柑子
老ぼれて尚ほ玉の緒や盆の月

百かゞり

盆の月

盆の月草家の持佛照しけり　松畔
草の家に兄弟多し盆の月　蕉雨樓
瓜の皮に濱の小虫や盆の月　はじめ
盆の月凡夫盛んに躍りけり　秋青
盆の月白玉樓も見ゆるかな　梅莊
盆の月鵜匹が宿の宵寢かな　竹山人
物干や火の見や二十六夜待　小波
知らぬ間や廿六夜の月明り　碧童
富士八合脚下の廿六夜かな　參天
艦橋や二十六夜を當直す　綠水
妙音や二十六夜の浪がしら　渡川
花に引かぬ杖引く廿六夜哉　青巴
甲板に酒酌む二十六夜待　眞名文
砂濱や二十六夜の捨籌り　若翁
斗酒盡す廿六夜の庵かな　老莊
門川に鍋洗ふ間や初月夜　一雲
初月や舟嬉しがる歌行脚　半舟

弦月　弦月や猛獸鹿を拉し去る　十歩老
二日月　荒波や二日の月を捲いて去る　子規
二日月海峽落る濤の聲　霽月
母連れて遲き船出や二日月　山可
飛驒山の寒き姿や二日月　藍雨
新月　新月やはづかに白き蘆の花　素石
松の上に新月淡き岬かな　竹泉
三日月　日蝕の三日月程に殘りけり　子規
夕風や三日月見ゆる船の窓　同
大波を打ちかぶせけり三日の月　同
遊船の灯のゆら〳〵や三日の月　碧梧桐
ひもろぎの莚の露や三日の月　同
巡錫の徒歩におはすや三日の月　同
三日月に女ばかりの端居かな　鳴雪
木綿干す竹虎落や三日の月明り　同
三日月の落ち方に見ゆ岬かな　碧童
三日月の落ちあへず潮高まりぬ　同

三日月や細き薄の穂を出でゝ　麥人
三日月を沈むる越の怒濤かな　松濱
三日月の沈むや空の水淺黄　殘花
亭長に留む一詩や三日の月　不喚樓
三日月や夕日の蔽をおろす頃　紫人
西ひらく瀨戸と覺えて三日の月　六花
三日月をさみしみ見るや秋の蚊帳　翠香
三日月や黑き待乳の梢より　塵山
三日月や草むら暮れて孔雀草　牛歩
三日月の落ちかゝりけり三保の松　春波
三日月や女出て行く風呂のれん　秋菊
三日月や萩ふところの潦　胡霞
三日月や浪くらく舟一つ來る　花命
三日月の角を掠めて夕鴉　一樂
三日月の兎は如何に暮すらん　敗天公
落ちかゝる三日月凄き古塔哉　風香
月三日人十八の戀衣　春潮

待宵

三日月や嵐の後との草の山　笑風
待宵の晴れ過ぎてさてあした哉　子規
待宵や隣は粟をはかる音　北齋
待宵や肱に冷たき置机　玲瓏
待宵を萩の籬に更しけり　泰洋
待宵のうたてや終に曇り鳧　夢明
待宵や月に愁の雲走る　燕郎
待宵や比叡を下つて洛に入る　吾鳴

名月

名月や白き鳥飛ぶ海の上　子規
名月やまず穂の芒風もなし　同
木犀の香や名月は曇りけり　同
名月や海に落ち込む星淡き　極浦
名月や空の潤さに海平　同
名月に彼の君見ゆる片頰哉　同
名月の雨失戀の詩人かな　鳴雪
名月の濱邊に才子佳人かな　同
積善の家明月の今宵かな　同

名月に瀬戸のなごろの高さ哉　蝶衣
明月や脱ぎたる沓の底にてる　同
明月や酒泉の大守歡をなす　同
明月や丸きは僧の影法師　漱石
名月に陸穂ばたけの鳴子哉　碧童
名月や錢を並べる茶屋の牀　青々
名月や矢文で來たる歌一首　無黄
名月や一廓をなす坊十二　碧梧桐
名月の海原かぎる芒かな　雛沙彌
名月や金波流れて舟による　霽月
名月や朝臣居並ぶ西の對　小波
名月や懐裡に遊ぶ庵主かな　鬼城
名月や大盃に望むべく　活東
名月に夜越す山の芒かな　東洋城
名月や尻の冷えゆく草の露　水巴
名月に汐待船や寢釋迦山　五丈原
名月や紀の關守が歌一首　吟月
明月や吾作が家の芋料理　眞名文
名月を期して天下の句會哉　眉月
名月や隱士の妻の酒を煮る　空々
名月や小萩に濡るゝ笛袋　世外
名月や薩摩琵琶彈く男振　玉鬼
名月や松の館の小酒盛　句仁王
明月や小便をする隈もなき　雪溪
名月や山家は凄き屋根の石　蛸魚
明月に馬曳出だす舍人かな　慶章
名月や汐を湛えてうつせ貝　香村
名月もやゝに更けゝり砥並山　素泉
名月や繪莚を織る水の村　幾代
名月に向き居る箱の兎かな　鶴聲
名月や白浪よする山の裾　郊春
名月や人遠ざけて松高し　濱人
名月や寧樂に年古る冠師　蘇庵
名月に數ふる寺の疊かな　一清

名月に魂魄ぬけし案山子哉　柑子
名月や五位鷺飛んで南す　金波
名月に芋煮ておはす聖かな　二水
名月や波立て〻來る魚の群　花傘
名月や七堂伽藍三笠山　香溪
名月や松三尺の離れ際　彩美
名月を袖にかついで舞に鳧　晴江
名月や河原の中の松林　溪花
名月や逡巡として舟二艘　竹馬
名月や筆嚙む人の美しき　西瓜
名月に人なき島を巡りけり　桃葉
名月に大きな雲の迫りけり　死酒

今日の月

歩く程の庭は持ちけり今日の月　子規
玉になる石もあるらん今日の月　同
文臺や古人に耻づる今日の月　橡面坊
今日の月巡羅の任に當りけり　極浦
永樓に四皓の醉や今日の月　三蕉
火の氣なき葬が宿や今日の月　香村
今日の月昔十三七つかな　獨笑
高麗人と山に上りぬ今日の月　笛人
漕出て名を問ふ山や今日の月　如一
城跡の詩僧訪ひけり今日の月　霽月

月今宵

月今宵看は三五十五文　子規
莫兒比涅の量ませ月の今宵なり　紅葉
月今宵芒賣こそおかしけれ　鳴雪
舟に上る章魚もあるらん月今宵　格堂
商人の腰折歌や月今宵　吾空
月今宵舞ふや霓裳羽衣の曲　柳家
月今宵ひろごる雲に憂ひあり　句佛
月今宵荷鞍に僧をのせにけり　撲天鵬
月今宵潮は渡頭に滿ちまさる　田士英
月今宵出潮に浸る鳥居かな　盧鳴
月今宵一人山守る男かな　淡郎
月今宵三位の君が小謠かな　春潮

月見

日車の家毎にあるや月今宵　陽石
一行に繪かきも交る月見かな　子規
重箱の芋ころげ落つ月見かな　同
兎角して九年の月見友もなし　同
月見船三味線ひいて下りけり　霽月
皆椽に出て月見るや學問所　蝶衣
元船に車座つくる月見かな　六花
瓜は伏し南瓜は座して月見哉　素泉
舟腹に足を加へて月見かな　知十
長江や漣よする月見堂　丹鷄
よき人と人を避けたる月見哉　素醉
城山に侍衆の月見かな　包石
門口に胡蘆一枚の月見かな　秋水
眼前の稻を喜ぶ月見かな　青滋露
蜑の子と小島に登り月見哉　白里
傾城の襠裲輝く月見かな　野水
町裏に艤ひす月見衆　村家

月見の衆そこら砂上の偶語哉　極浦
月一輪星無數空みどりなり　子規
笛の音や遠くに見ゆる月の人　同
汽車の窓にさしこむ須磨の月夜哉　同
椽に置く笈に月照る宿りかな　松濱
さら〳〵と蘆鳴る月の出潮哉　同
月出しと云ふて湯女過ぐ廊下哉　同
庵の月我横はる假寢かな　碧梧桐
洲の浮ぶ浪に輪を書く月夜哉　同
月前に高き畑や市の空　同
雨晴れて月に傘さす男かな　虚子
元祿の面影に立つ月夜かな　同
叡山をうしろに琵琶の月夜哉　同
夜を急ぐ囚人駕や月の雲　鳴雪
磯の月舟たでる火の遙かなり　同
月幾夜埃に雲る都かな　同
草の月臆病馬に乘りにけり　鬼城

築崩して浪たゞ白き月夜かな　鬼城
月出でゝつんぼう草も眺めかな　同
枯松も今日の景色や浪の月　香村
御簾透いて見ゆる冠や月の宴　同
泥足を洗ふも月の盥かな　同
月に出て谷へ落すや栗の皮　石鼎
貝屑に蟬きゝぬ磯の月　同
谷水に陰黒々と月夜かな　同
影参差松三本の月夜かな　漱石
酒なくて詩なくて月の靜かさよ　同
月の出や爭うて湯壺上がる人　蝶衣
月に遠く遊べる雲や海の上　同
森を出て河畔の月にイみぬ　八重櫻
荻の月漁家にも藁を打つ音かな　同
遠火事は湯村なるかや月の下　裸木
母をつれて月夜の海を渡りけり　同
銀鞍の冷え來し月の一夜かな　櫻魂子
掛け鍬のかゞやく土間の月明り　同
犬と我筆に立つや晝の月　泊雲
十字路に亡國の月や二三人　同
月がさす閨の鏡の覆ひかな　死酒
島根打つ吾艪の浪や月明し　同
仁和寺を出づれば月の蕎麥畑　繞石
越えんとす芒白川朝の月　同
月を踏みて松露など得し面白さ　紅葉
更科の話もいづる月夜かな　露石
月高く夜立調なふ人馬かな　碧童
雲の裏照して月の急ぐかな　松濤樓
川尻の潮に煙る月夜かな　霜川
月に僧來べき宵なり竹林居　ゆう〳〵
鑛山の月强酒に忘る疲勞かな　子瓢
大股に月夜の巷歩みけり　乙字
流れ雲包みし月の玉や吐く　里靜
蘆の中に波の打込む月夜哉　波空

囃舟流るゝ月の夜頃かな　二星
弘法の法の芋賣る月下かな　四子
月の園蔭なき石に息ひけり　竹後
僧二人月を見て居る天窓哉　西男
草の戸や數々月の供へもの　作郎
江戸立を見送る門や朝の月　彩雲
桐の葉の月を遮る我座かな　素醉
漏る月に寢ねたる牛の尻淋し　禪寺洞
醉狂の盃投げん池の月　至青
高き山に聖と語る月夜かな　燕郎
門たゝく紈袴の業や萩の月　紫雲
月細し清水寺の太柱　一樹
訪ね寄る檜垣の宿や古都の月　天鼓
取り出でゝ月に拂ふや琵琶の塵　木母庵
月の詩に富める長江遊記哉　之莊
鞍馬山月に天狗の礫かな　孤村
露を踏む川原蓬や水の月　滴翠

月に雲折々竹のあらしかな　洋々
夕暮や月を待乳の山ありき　可肅
冷飯を頬張るや庭に月白し　徂春
月に座して三千の僧皆默す　一堂
月に雲遊子が深き歎きかな　柳湖
踊遠く我家は臼の月夜かな　里風
大德の狸叱るや庫裡の月　雨聽
耻かしき君と二人の月の影　古拙
鳴子ひく繩の上なり秋の月　尺蠖

秋の月

一帶の草山低し秋の月　同
かすみ張る山本くれて秋の月　青々
山陰に水汲む人や秋の月　靄人
瀧の上に離れて小さし秋の月　一樹
月の秋二尺の鱸尺の鯉　着刀
見て嬉し詠ふて悲し秋の月　箕雀
晝中や人の眼につく秋の月　晩香
月の雨團子を食ふて將棊哉　子規

雨の月

月の雨天氣豫報もあたりけり　子規
句を案ず蒲團の中や月の雨　同
月の雨芒の招くべくもなし　松宇
月に雨團子に石のある世哉　同
月の雨誘ひ文にかへりごと　句佛
墨にじむ唐紙の月の雨夜哉　同
遠里の祭囃子や雨の月　乙字
景と情二つながらや雨の月　極浦
言問や渡しの傘の月の雨　柑子
行燈に恨みの歌や雨の月　至青
觀念の枕に就くや月の雨　楓江
傘や雨月にさして薄ぼらけ　鬼城
傘提て無月を見にぞ淀の橋　青々

無月

薄しらみ見ゆや無月の山かづら　同
團子屋はさして無月や岡薄　同
知己三人肝膽照す無月かな　竹の門
萩芒ふるき里わの無月かな　竹後
痩馬の無月に早き足搔かな　鬼城
香のうせし香焚き佗ぶる無月哉　孤軒
圓居して無月かこつや詩歌俳句　香山
行燈の下に無月の硯かな　柑子
竹に透く無月の寺の灯かな　栗人
無月の戸閉めて灯火かゝげ鳧　泊雲
逆境に詩の人泣かん無月哉　片水
深草に笠かり戻る無月かな　飛雲

下り月

下り月人は夜なべの臺所　青々
風をいたむ野もせの草や下り月　蝶衣
降り月楸に北のふきそめし　鼓竹

殘月

殘る月源氏にもれし光り哉　黃蘗
殘月や館を退かる琵琶法師　雨翠
殘月や最明寺殿の笠の上　梅應
殘月や露に明けたる彦根城　鶴年

十六夜

十六夜や河原楸に出でゝ見る　青々
十六夜も曇りてありき薄山　同

明月も十六夜も皆雨にして　子規
十六夜の月は芙蓉に疊りけり　瀾水
十六夜や比叡を離れし雲一朶　大羽
十六夜の雲を動かす嵐かな　蝶衣
十六夜や暗き灯を置く萩の殿　鼓竹
十六夜や闇のほぐるゝ汐明り　桂影
十六夜やしばし小暗き草の原　黄木
十六夜の阿佛尼一人机　蘆丸
居待月　萩散て庭に北吹く居待かな　君郎
確と逢ふ約束の夜や居待月　靖園
二十日月　川柳枯れ立つ二十日月夜哉　碧梧桐
十三夜　繰りあぐる滿月會や十三夜　子規
柿喰うて庵主おはしぬ十三夜　月村
滯陣の連歌も豆の十三夜　竹の門
十三夜野守が妻は狐かな　松濤樓
次の間は板敷にして十三夜　青々
十三夜在所の寺に客一人　栗人
十哲の像に献茶や十三夜　柑子
後の月　後の月つくねんとして庵にあり　子規
葉まばらに柚子現れて後の月　同
仲秋の韻をたゝむや後の月　同
磐梯の晴るゝ夜まれに後の月　碧梧桐
任地去る人の妻子や後の月　同
後の月赤きより白き詩箋かな　同
後の月無事な宗祇の髭の露　竹冷
椽先やちろりの酒に後の月　同
後の月我師に頭巾まゐらせん　同
後の月唐箕の市に五六人　鬼城
高波の碎けて寒し後の月　同
後の月に明るうなりぬ八重むぐら　同
水栗の雫しにけり後の月　紅葉
後の月清光今夜としたり顔なる　同
柚釜冷えて又なく貧し後の月　不喚樓
出惜んで居りし幾夜や後の月　同

酒垂るゝ音の澄みけり後の月　醉佛
後の月泊りほうけし僧一人　同
後の月里は芒に飯時分　青々
後の月尾上の寺の見えそめし　小波
朗詠のすたれて久し後の月　碧童
頭より羽織りて後の月見哉　橡而坊
我老を語りきかする後の月　櫻魂子
詩の弟子の坊主の弟子や後の月　鱸江
女房の顏のふるさよ後の月　黃雨
武藏野や芒ほうけて後の月　眞名丈
晩き方木の實降るなり後の月　青萠
短尺の雲に歌なし後の月　里靜
後の月再び琵琶に泣く夜哉　方外
町中にひくき山あり後の月　王郎
庵に近き添水の音や後の月　琵湖舟
杉の穗も既に寒さや後の月　海王星
蓑と笠と女二人や後の月　辰生
三山を羽黑詣や後の月　金鷄城
歌垣に交る圓顱や後の月　梅叟
大文字を北に外づれて後の月　左衞門
後の月木々さゝやきて明き哉　柑子
竹椽に冷たき尻や後の月　一楓
名殘月
謠曲や名殘の月に夜を更す　榎村
姨捨にひとりなごりの月見哉　半醒
秋日
鳥一羽飛んで秋の日落ちにけり　子規
大根の二葉に秋の日ざしかな　同
秋の日の薄雲がくれ蝕す也　同
秋の日を避けてか栗鼠の枝移り　露月
近作を畫室に掛くる秋日影　碧梧桐
秋の日や韮咲く中に蜂の聲　八重櫻
萬僧の袈裟に秋の日晴れに鳧　青嵐
秋の日のしばし佛間の疊かな　吟月
秋の日や錦商ふ蜀の市　山梔子
秋の日の病顏赤き藥酒かな　柿園

秋一日雨にはためく吊旗かな　柳雨
唐黍の穂の曲るより秋日かな　岫雲
秋の日や人形かわく一ト莚　漂雨
馬糞掻いて秋日沈める大地かな　禪寺洞
軍艦を見に行く人や秋日和　子規

秋日和

朝鳥のくれぱうれしき秋日和　同
葉鶏頭の四五本秋の日和かな　同
分れ飛ぶ雲や慘たる秋日和　鳴雪
秋日和廣き野道の茶店かな　虚子
畑に出て若者勵む秋日和　碧梧桐
秋日和遙に鷺の居る田かな　東洋城
浪白う干潟に消ゆる秋日和　乙字
洛外の松茸飯や秋日和　守水老
帆柱にもの干す笊や秋日和　青嵐
神さびて木々聳ゆるや秋日和　霞溪
御經の黄紙を漉くや秋日和　一峯

秋晴

秋晴れてものゝ煙の空に入る　子規

秋天に亂峯高さ爭へり　同

秋天に入る山道のうねり哉　松濤樓

朴の草や秋天高くむしばめる　蛇笏

秋の雲

秋の雲瀧を放れて山の上　子規

見渡すやたゞ秋の空秋の雲　同

夕燒けて日和になりぬ秋の雲　同

隔て住む心言ひやりぬ秋の雲　碧梧桐

峽中記その一節の秋の雲　不喚樓

利根川や舟呼ぶ岸の秋の雲　雨六

沖荒れて出船なき日や秋の雲　孤軒

船人や秋の雲見て日占取る　活堂

古墳を發けば秋の雲起る　塵山

秋の雲峯ともならで紅き哉　士櫻

狐憑の吊り上る眼に秋の雲　四明

蒲の穗の水に揃へり秋の雲　知白

秋の雲嶮しきに踏み登るなり　死酒

柩過る谷中の道や秋の雲　菫村

三郡に及ぶ出水や秋の雲　王城
秋雲や枯枝に蜻蛉二三疋　霞溪
秋の雲ちるや案山子の笠の上　山外
秋の雲淡々として暮にけり　幽山

鰯雲

鰯引く夕べの濱や秋の雲　花陸
松原や海のあなたに鰯雲　董湫
鰯雲天城颪は凪にけり　涼弦

秋雨

紫陽花や青にきまりし秋の雨　子規
掃溜に鴉啼くなり秋の雨　同
柴又の茶店出づれば秋の雨　同
空家に下駄であがるや秋の雨　鳴雪
見る事も聞く事も秋の雨幾日　同
駄馬多き四谷に住て秋の雨　同
家出せし子を泣く母や秋の雨　虚子
江の島や綠りの潮に秋の雨　同
汽車を下りて赤帽居らず秋の雨　同
振舞に蓑笠で來て秋の雨　碧梧桐
柱つたふ漏りおぞましや秋の雨　碧梧桐
秋雨や鼠の穴の壁を漏る　同
秋雨や萩の根にぬれぬ石一つ　松濱
苦覗く眉に雫や秋の雨　同
とまり木に糞つもる鳥屋の秋の雨　蝶衣
節穴に紙貼る秋の雨戸かな　同
御佛のお顔のしみや秋の雨　鬼城
秋雨や柄杓沈んで草清水　同
秋の雨とくや米坡が白髪染　紅葉
馬買うて市を出たれば秋の雨　竹冷
膠煮る佛師の家や秋の雨　小波
舟を待つ傘のしぶきや秋の雨　稻青
秋雨や油流るゝ石燈籠　霽月
丸木橋代へて生木や秋の雨　癖三醉
行燈に怪物書くや秋の雨　八重櫻
水澤來て足の白さよ秋の雨　不喚樓
山の戸の郵便受けや秋の雨　東洋城

秋の雨壁の匂ひのする夜哉　鶯塘
鵜の浦の糞しろ〳〵と秋の雨　柚翁
秋雨や夜野を過ぐる光り物　波空
秋の雨郵便が來たけはひ哉　醉佛
過去帳に佛探すや秋の雨　弓月
秋雨の佛間に籠る翁かな　世音
酒菰かけし野菜車や秋の雨　俳小星
秋雨にぬるゝ施餓鬼の小旗哉　河美蓉
柑類の畑明るし秋の雨　梅瘦
秋の雨古傘借りて戻りけり　至青
秋雨や小笹に蝶のやつれ飛ぶ　蓼葉
秋雨や草の上飛ぶ光りもの　翠南
錢なくて立てぬ旅籠や秋の雨　孤杉
秋雨や巽風吹き込む上總澤　偉風
秋雨や舟に人居し咳拂　濬樓
秋雨や佛の顏の薄暗き　古蹊
秋雨や快々として左馬頭　谿山人

柄漏りする古傘佗し秋の雨　西湖
荒壁にひろごるしみや秋の雨　荔枝
秋雨や穴觀音の宿り人　八重櫻
疊替へて古き家かな秋の雨　たけし
帳外は侍座の嘘めや秋の雨　青嵐
秋雨やうすく灯ともる舟障子　松濤樓
岸草に音なき水や秋の雨　雉子郎
秋雨や歪みて古りし槇柱　香村
わたましの荷の上晴るゝ秋の雨　素泉

秋時雨

落日に再び秋の時雨かな　月斗
かゝり人時雨るゝ秋を寢て眺む　同
秋もはや日和しぐるゝ飯時分　子規
屋根草の立つ力なし秋時雨　尺角

秋風

さらば君明日はいづくの秋の風　子規
馬下りて川の名問へば秋の風　同
お日様を虫が喰ひけり秋の風　同
秋風やつめたき飯に朝日影　虚子

秋風や眼中のもの皆俳句　虚子
秋風や善き木柱の古びやう　同
歌よみの庭の草木や秋の風　蝶衣
秋風や紅に染めたる蟹の甲　同
秋風に尾上の鐘の蒼さかな　同
疲れ歸りてたゞ秋風の我家かな　濱人
母死にて父の大酒や秋の風　同
秋風の浦に灯投げて廓かな　同
大なる雲の穴目や秋の風　八重櫻
秋風の撞木を渡る鼠かな　同
大湖のあかるき空や秋の風　同
虫けらもうしろ見られつ秋の風　青々
地獄の畫かけて炙や秋の風　同
秋風や淀の質店裏見ゆる　同
秋風や藻屑沈んで水の垢　紅綠
秋風の突きあたりより二本松　同
石山の石より白し秋の風　同

秋風や子を持ちて住む牛殺し　鬼城
淋しさや犬ころ草に秋の風　同
秋風や破れてかゝる蜘蛛の陣　同
秋風や馬の顔ふく外ケ濱　碧梧桐
追善の芝居幟や秋の風　同
秋風や藁でくゝりし蜑が髪　彩雲
亡國の町の廣さや秋の風　同
秋風や訴訟起せしかゝり船　月舟
秋風に屑の中なる錦かな　同
秋風の題に畫きぬ掛煙草　碧童
老をかこつ妻美しや秋の風　同
秋風や鹽燒く煙眼にいたき　句佛
虫ばむに摘まざる桑や秋の風　同
秋風の袂を搜る酒錢かな　紅葉
賣るものに椽餅もあり秋の風　露月
莚帆のばたり〳〵や秋の風　知十
日の入や秋風遠く鳴つて來る　漱石

龍華寺や秋の風鳴る塔の鈴　無黄
水桶の底はぬけたり秋の風　愚佛
御僧は風羅念佛か秋の風　虚明
秋風や藪越し見ゆる木綿巾　霽月
秋風や人を見て啼く夕鴉　へき
秋風に足を吹かるゝ寢覺かな　活東
秋の風芭蕉すれ合ふ音がする　四丁
國境を越ゆる秋風第一信　洋々
干瓢に秋風吹くや軒の下　麥人
秋風やへりにへりたる力杖　山梔子
酒のまぬ人と別れぬ秋の風　吾空
秋風や脊をすれば鳴る杉柱　龍耳
秋風や水夫にかゞやく港の灯　蛇笏
洞口に打込む濤や秋の風　田士英
秋風や誰が住み捨てし明屋敷　獨行
故里へ送る遺髪や秋の風　芋村
秋風や越の湊の子買船　里静
妻木焚く漁家の煙や秋の風　好翠
矢を負ふて空行く鳥や秋の風　射石
秋風や干潟に下りて鴉なく　叟柳
秋風や古廟に悲歌を題し去る　孤村
鹽ぬりて傷癒しけり秋の風　俳小星
吹きさらす流人の顏や秋の風　泊月
大寺や疊の上を秋の風　若翁
秋風や兀山越せば後ろ吹く　月城
木食の餘命を吹くや秋の風　禽化
舟の灯に黄昏るゝ江や秋の風　鶴聲
勘當の質屋の子息秋の風　楓涯
湯上りや秋風臍の穴に入る　滕六
山門の蹴落し坂や秋の風　榎村
藏破る大盜人や秋の風　鶯子
松の木の眞葛手繰れば秋の風　狂童
秋風や名所の水の雨濁り　燕郎
山はげて秋風吹きぬ黍の上　飛雨

欄に見る易水白し風の秋　翠峯
秋風や沖へ吹かるゝ根なし雲　幽村
ちらばらに堀の古藻や秋の風　牛伴
星とんで松に吹くなり秋の風　晩翠
秋風や暮れて小さき向山　一柏
秋風や稲荷に古りしちぎれ旗　水鏡
まだ賭けぬ我がしゝむらや秋の風　普羅
秋風や四五本戰ぐ屋根の草　桃蹊
黄昏や只秋風の雜木山　梧大
秋風や平家を語る琵琶法師　秋水
秋風や反りかへりたる市の魚　臼外
秋の風もの事に動く眉太し　青鏡
足下の草から起つや秋の風　晩香
秋風や海に漂ふ破れ笠　晶波
秋の風琴の古糸吹にけり　素月
逢坂に逢ふ人もなし秋の風　洗耳
秋風や古き鏡のうす曇　如雲

秋霜

秋風や落首書かれし醫者の門　楓江
秋風にわれと見出でし己れ哉　石鼎
浪が來る秋風が吹くや島の寺　秋蒼
秋風や我が鬚君の髮白し　葦水
千仞の岩に蔦なし秋の風　泊雲
旅に病んで衣賣りけり秋の風　楓涓
鹽籠や一ト日は焚かす秋の霜　虚明
秋の霜にさきそふものや梅嫌　同
人はしらじ尾花が下の秋の霜　同
山深く通草くさりぬ秋の霜　子規
獸を見るべくなりぬ秋の霜　露月
月の影其まゝ霜となるや秋　活東
おちてある八つ手は黄なり秋の霜　蜃樓
秋の霜南天の實に染めたらず　觀魚
畦豆の下葉黄ばみて秋の霜　溪水
秋の霜野は裏枯るゝばかりなり　鬚男
百菊は荒れて霜見る秋となり　几湫

草の露夜舟をあがる草履かな　子規
大佛も鐘も濡れたり森の露　同
獵夫も犬も濡れたり草の露　同
白露や葬の中に立佛　碧梧桐
高黍の野路になりけり露の降る　同
露深き草の中來ぬ塔の下　同
道のべの祠拜むや露の中　虚子
露深し壁にとりつく萩の蟲　同
盲ひたる夫に暗しや露の宿　同
灯ともせば草皆露の光りかな　へき
白露や一燈ゆるぐ杜の中　同
白露や糸瓜に映る隣の灯　同
紅葉に我情かなし露の秋　蛇笏
露さだがに道行く我を樂しめり　同
葬人は山邊や露の渡舟漕ぐ　同
原上に一峯淡し草の露　霽月
彦七が墳とて露の葬かな　同
筵帆の露兩岸の鷄の聲　霽月
白露の草皆二寸ばかりなる　露月
草の葉廣草の葉細や露の玉　同
材木の間を行くや露じめり　同
箒木にあしたの風や露もなし　繞石
尻端折る褄持つ二人露の道　同
草の露はだしの脛にばつた哉　同
臥龍松一斗の露を雫かな　格堂
白露やよべ御微行の玉の沓　同
露踏んで聲無き牛の歩み哉　碧堂
木犀の香に匂ふ露のしとゞ哉　同
楢山へ牛追ひあげぬ今朝の露　蝶衣
露に來し妹紫の端緒かな　同
朝露を結ぶ薊の頭かな　句佛
朝樵りの露ひぬ山を早戻る　同
猪の牙とぎ石や草の露　射石
大原女の白きはゞきや草の露　同

露しとゞ降る夜や沈む海の音　石鼎
芭蕉すかと切れば何吐く今朝の露　同
むら鳥の低きに飛ぶや露の秋　松宇
露の戸やしづまり返る人ひとり　同
露降るや畑肥えたる三河島　八重櫻
厩出の馬の子飛ぶや露の原　同
吟行の露ふみ碎く月下かな　小魚
草の露草鞋の紐のとけにけり　同
長安の蔓に露の朝日かな　洛燕居
白露や琵琶偷みきく籬の下　同
露と草風に相撲をとつたりな　紅葉
おつるとは梢の露も哀れなり　同
道の邊や露深草の搾車　鳴雪
山科や徑幾すじ草の露　竹冷
兀山や土に流るゝ草の露　青々
細竹の垣や露もつ蕨縄　四明
露の間を京へいそぐや嵯峨の尼　露石
露ながら帆を張上げし船出哉　活東
白露にあはれをとめし情話かな　月舟
裏坂の露にあぶなし朝詣　小波
草臥も未だ朝露の草鞋かな　無黄
露にぬれし床几並べる出茶屋哉　三允
叢の露這ひ出る蟹赤し　青嵐
草の露妹が尻切れ草履かな　巨口
高草の露一番にこぼれけり　古泉
露の畑の日の出ぬうちを小百姓　たけし
殘月や小草の花の露の玉　水巴
磯草や露の戸をもる貝灯　蘆仙
露葎揭げし札に旭あたる　紫影
露分けて多賀の碑を見にまかりけり　守水老
茜染一夜夜露に當てにけり　素泉
花籠を背に千草の露を踏む　綠也
草山の月にほろ降る夜露哉　里靜
草の露勢子に逐はるゝ兎哉　烏雞

露の戸を明くれば昇る旭哉　眞名文
白露や胸より高き草の丈　飛雨
露の宿に布團重たくたゝみけり　禪寺洞
馬持て露の玉葛苅り干しぬ　菫哉
露にぬれし馬の結び尾ほどき鳧　余子
道狹く露したゝかに草長し　三川
武藏野の露にあけ行く雀哉　泊東
尻高に下り來る馬や露の道　霞溪
低き灯の或は二つ露の原　青枝
有明や紫凝つて蘭の露　瘦梅居
土くれにはえて露おく小草かな　鬼城
朝露や草にはりたる蜘の網　靜岐
天幕の幕のゆるみや曉の露　晩村
後宮や三千の蟲露に鳴く　古琴
ひた濡るゝ露の小笹や峯渡り　奇遇
曳船や露の簑敷く草の上　橋女
赤き旭の海を昇るや岡の露　一笑
露置くや瓜の枕の小麥藁　香墨
朝露や白川を出る花賣女　柿園
露の中山蟹出る野菊かな　楓山人
酒さめて船を立ち去る夜露哉　南浪
石あれば海の墓なり露の海　普羅
白露や毛見の脚絆の鮫小紋　康人
朝露の草刈り上る端山かな　雪溪
消え殘る墓前の香や露じめり　翠松
晴るゝ夜の露降る都大路哉　銅牛
朝露やみな濡れてゐる梨俊　蕉雨樓
美き禁裡の砂や露しぐれ　青々

露時雨

露時雨祇園を出でゝ眞葛原　同
處々水の穗蓼や露しぐれ　同
人入れぬ鳳凰堂や露時雨　椽面坊
斧打て大樹震ふや露時雨　同
月の夜や蘆の入江の露時雨　竹冷
八十神の御裳裾川や露時雨　碧梧桐

あか〳〵と竈火燃ゆるや露時雨　裸木
露時雨榛名へ越ゆる馬上哉　菱花
曉を下ろす嵐や露時雨　羽山
朝風や樹下石上の露時雨　刀川
石徑に烏濡れたり露時雨　六花
露時雨刈草かたげかち渉る　雪庵
露時雨竹椽めぐる庵かな　翠松

露霜

露霜や蓬生の宿に人病めり　紅葉
露霜の芹に下りし鳥かな　大羽

露寒

霧晴れて川沿ひ露の寒さ哉　碧梧桐
露寒や室へ舟出す頰冠り　竹冷
露寒し明星殘る草の上　松宇
露寒のふるとしもなく秋の先　知十
露寒き垣根にならす鋏かな　久寶
露寒し肩さしかへる土手の駕　燕子

霧

夜霧こめて赤き灯見ゆる廓哉　子規
霧晴るゝ田の面や鷺に旭のあたる　同
大鳴戸船吸ふ渦に霧走る　松濤樓
朝霧の凝りて芙蓉の雫かな　紫人
霧の朝罠に物鳴く叫びかな　觀魚
見捨て行く花洛を籠むる狹霧哉　水棹
夕霧や炭燒く煙黄になびく　波空
霧晴れて聳ゆる山や眉の上　雷死久
麓田や霧吹き下ろす山の風　汀花
霧降るや啄木鳥來居る松高し　喜舟
夜の霧の机にせまる山居哉　村雨
霧更けし江差の村や遠砧　花陸
大沼の霧這ひ上る山邊かな　巨口
夜があけて霧の海なる山家哉　栗人
霧吹くや門を歪めて大蘇鐵　禪寺洞
霧晴れてそば畑白し家の前　象村
電燈に夜霧こめたる巷かな　吐月
一廓の松を流るゝ浦の霧　余子
霧こめて街頭黄なる月夜哉　波扇

石垣に頬する馬や朝の霧　月王
夕霧や密獵の船北しけり　黒子
霧吹て山晴際の瀬音かな　彩葉
机掃て霧晴れて山新なり　師竹
夕霧や竹ひきずりて山下る　俳天心
うす霧や唐黍高き膳所の浦　虚明

霧雨

霧雨にぬるゝ手摺の草紙哉　松濱
霧雨の三輪を夜出づる灯哉　木外
霧雨や橋わたる人並び行く　飛雲
霧雨に濡れたる菊の蕾かな　炎天
霧雨や建網を張るまだきより　碧童

霧時雨

大磯に傘重なるや霧時雨　虚明
霧時雨松柏廟を圍みけり　草萊
芒伏し萩折れ野分やみにけり　子規

野分

見に行くや野分のあとの百花園　同
人がやゝ土塀を起す野分哉　同
大空を宙に吹き飛ぶ野分かな　碧梧桐
熊阪の夜を行く里の野分かな　碧梧桐
瓜垣のつぶれめでたき野分哉　同
野分して野中の古井水もなし　鳴雪
野分する彦左衞門が屋敷かな　同
野分やんで午の貝吹く小村哉　同
夜明から吹きいだしたる野分哉　虚子
發心の髻を吹く野分かな　同
女客我家氣遣ふ野分かな　同
青樓の更に灯ともす野分哉　露月
野分やんで川明らかに渉り鳧　同
溫泉煙の樹々に裂けゆく野分哉　同
照りつけて雨もこぼさぬ野分かな　泊雲
枝戰へど幹靜かなる野分かな　同
蟷螂に白日濁る野分かな　同
野分してけもなく澄ぬ水や空　青々
堰水の草に吹こす野分かな　同
野分して波うつ池の捨小舟　把栗

大木の倒れんとする野分かな　把栗
弓になつて唐黍の鳴る野分哉　碧童
比枝下りて在家に居れば野分哉　同
妖星の高く照して野分かな　青嵐
一としきり鐘に雨射る野分哉　同
干網に蜻蛉吹かるゝ野分かな　松濤樓
野分やんで五位啼き過ぐる月夜哉　同
野分止みぬ銀杏拾ひに小提灯　四十雀
野分晴屋根を漏日の佗しさよ　玄耳
移さんと想ふ樹抜けし野分哉　同
葛畑の蔓亂れ立つ野分かな　癖三醉
籾殼の臼や舞ひ出る野分かな　句佛
鉢の木の野分に遭ひぬ鉢ながら　麥人
打ちたわむ野分の竹や草の如　稻青
打上げて野分の濱の汐木かな　無黃
野分吹く今はの際の瓢かな　八重櫻
はさみ無き蟹の道這ふ野分晴　蝶衣

辻地藏の首なほす人や野分晴　花囚
林より月をゆり出す野分かな　菫哉
三井の鐘湖にひろごる野分哉　柑子
芋の葉に天下分目の野分かな　巨雷
やからして野分に行燈守る夜哉　梅瘦
水禽の番はなるゝ野分かな　死酒
風草の節根をうせし野分かな　魚鱗
葛籠なる小袖思ふや野分の夜　普羅
萬壑の野分に座する孤燈かな　快川
野分止んで月照る川を渡り鳧　雨翠
戸にあたる音凄まじき野分哉　大碩
流れ舟繫ぐ杭打つ野分かな　香村
高垣の糸瓜相打つ野分かな　桃雨
海鳴りの天にこたえて野分哉　北齋
梯子持て女房吹かるゝ野分哉　弓月
僧あさましく野分の辻を曲り來る　月舟
酒倉の蛇腹剝げたる野分かな　偃堂

胡籙に數の矢躍る野分かな　月波
交番を吹き飛ばしたる野分哉　竹風
大寺の雨戸の數や野分吹く　秋泉
逸したる馬探り行く野分哉　南陽
倒れたる垣を踏み行く野分哉　其石
舟出せと海坊主來る野分かな　霧堂
砂濱を走る野分の鴉かな　綠哉
野分やんで夕べ雀のお宿かな　裸木
山の溫泉の樋口破れし野分哉　小歡
枝川に小舟集まる野分かな　枯木
野分して野守の宿の飛んとす　帆影
大江山鬼の顏吹く野分かな　曾左運
街燈のこゝも消え居る野分哉　林泉
隼に追はるゝ鳥や夕野分　村雨
野分歇んで終日妹と掃除哉　摯月
流れ舟尋ねありくや野分跡　孤軒
人の家に我家思ふ野分かな　水巴

宿取つて連れを見に出る花野哉　松濱

花野行けば翅ならしてばつた飛ぶ　四明

姪つれて尼ぜの歸る花野かな　同

羊雲に夕陽黄なる花野かな　同

鷺の行く花野の南下りかな　八重櫻

出城ある國の表の花野かな　同

傘の下に花野を繪書きけり　同

流れ越して馬の子の來る花野哉　青嵐

濡れ柴を花野に干せる小家かな　同

嫁入はいつも狐の花野かな　松濤樓

よき尼の里へ用ある花野哉　同

花野來て松蟲塚を尋ねけり　橡面坊

夕されば美女砧打つ花野哉　同

濠無くて城廓存す花野かな　句佛

吟骨をこゝに晒さん花野哉　同

月の頃過て時めく花野かな　守水老

藥草の紫も咲く花野かな　同

鐘楼から稚兒我を嬲る花野かな　泊雲
帆の夕日草にかげろふ花野かな　同
末枯の薊も見ゆる花野かな　奇遇
港より山に上れば花野かな　同
一ト平花野に御山拜みけり　耕村
土佐が繪の花野や從者の徒渉り　同
落日の小草に動く花野かな　竹泉
七草を植えし花野の茶店哉　同
大文字に露ありたけの花野哉　一峯
馬の荷の櫨こぼれ行く花野哉　同
塚の松こけて淋しき花野かな　竹の門
さら〳〵と水流れ去る花野哉　春葉
女名のちさき塚ある花野かな　水巴
花野行くや背に笠遊ぶ額白　子瓢
花野路に一本ゆかし花かつみ　枕翁
黄昏るゝ雲紫の花野かな　其石
佛體を高きに拾ふ花野かな　狂童

沼圓く川くねり入る花野かな　不句
講宿へ花野を送る太鼓かな　左衞門
水白く花野の中を流れけり　雲外
花の原女に化ける狐あり　友江
倒れ碑に草生ひかぶる花野哉　得堂
花野行くや山根明らかに修竹林　禪寺洞
藁苞の豆腐雫す花野かな　牛歩
虹高し花野の畫を通り雨　潮葩
籠逃げし小鳥を追ふて花野哉　七面
見るうちに風船落し花野かな　三子
花野來て比良の横雲望みけり　華村
徐ろに暮れて花野の雨佗し　汀川

秋の野

秋の野や皆葬の戻り人　蝶衣
秋の野や夕日の塔を駕に見る　河骨
秋の野を振向がちの別れかな　杉雨

野山の錦

野の錦夕陽に人向ひ行く　霞山
洛外は秋の錦の野山かな　枯木

御幸野の錦は歌に詠まれ鳧　嶺葉
野の錦山の錦や湖心亭　小歡
龍田姫立田姫の餌を撒く鳥や渡るなり　蝶衣
秋の川中洲にも柳に家や秋の川　虚子
三段に水車かゝるや秋の川　癖三醉
流れ木に百羽鴉や秋の川　東洋城
秋川に押戻さるゝ野水かな　鬼城
秋の川山崩れ來てせかれけり　蝶衣
さゝやきの秋靜かなる小川哉　苔花
石に寄る小魚も見えて秋の川　醉骨
秋の川竹の筏を流しけり　折亭
柵の崩れかゝるや秋の川　孤村
秋の川橋架替へて谿紅葉　大我
秋の川底の小砂利の目に寒き　仲耳
秋の水　秋の水岩白の魚動かざる　子規
靜かさに礫うちけり秋の水　同
日蝕や蓋をして置く秋の水　同

曉や星飛ぶ草の秋の水　虚子
秋の水山を映して廣きかな　同
刑場の提げに酌み置く秋の水　同
秋の水湛然として日午なり　鳴雪
秋の水ある僧は毒と申しけり　同
墓道古りね首洗ひたる秋の水　同
藻を刈りて泥流れ去りつ秋の水　碧梧桐
秋の水冷々として鐘の下　同
江樓や月澄む秋の水千里　松宇
白露の凝りに凝りてや秋の水　同
石橋の凹み〳〵や秋の水　句佛
倒れたる碑石の文字に秋の水　同
晨鐘や流るゝ白き秋の水　三餘
禹の廟や壺に戴く秋の水　同
秋の水野中の鍛冶が戸に傳ふ　青々
斷橋に夕日淋しや秋の水　露石
秋の水劍なす峯繞りけり　無黄

底見ゆる一枚岩や秋の水　漱石
秋水に孕みてすむや源五郎虫　鬼城
浮島の草木染めけり秋の水　碧童
秋の水色まさり行く金魚哉　乙字
秋の水掬すれば鬚眉明かに　青嵐
秋の水法師が髭を洗ひけり　櫻魂子
砂に埋まる魚の尾見透く秋の水　寸陽
秋の水に浣はむ古き淨衣哉　世巷
關の井や逆髪祭る秋の水　素石
新刀を砥に上せけり秋の水　七宵
秋水や映る草の灯佛の灯　紫雲
秋水に溫泉の樓映る深さ哉　漂舟
秋の水覗けば光る小魚かな　其石
秋の水大聖耳を洗ひけり　啞牛
閼伽桶や六器を洗ふ秋の水　榎村
武藏野や一筋白く秋の水　如空
風折の松倒に秋の水　風裏
新宅に移し植う木や秋水邊　不棲魚
秋の水古廟をめぐり流れけり　巨鬼工
名鐘を抱いて沈まむ秋の水　銀波
鷺白く鶴白く秋の水白し　蝶哉
御手打の太刀に濺ぐや秋の水　竹泉
秋水に文殼流す美人かな　空方
秋の水蜻蛉も飛ばずなりに鳧　楚月
秋の水何もうつらぬ淋しさよ　一樹
川越ゆる我脛細し秋の水　飛天男

刈田

田の泥に雁の足跡殘りけり　子規
一反は刈り殘す田の雀かな　同
ところ〴〵菜畑青き刈田かな　同
刈田道紺屋の裏に到りけり　三允
暮るゝ日の赫と明るき刈田哉　松濱
銀杏黃む寺を遠目に刈田哉　水巴
稻運ぶ車引き込む刈田かな　松濤
刈伏せし稻田を鶴のありく哉　觀魚

夕立の陰に鳥起つ刈田かな　燕郎
青々と刈田に寒き小草かな　鬼城
お寺より鶏がこぼるゝ刈田哉　東洋城
志賀の里秋靜かなる刈田哉　寒巖
落柿舍の廻りは廣き刈田哉　時雨
晩稻田の水も落してしまひ鳧　子規
千町田や夕靜かに落し水　同
新田や汐にさしあふ落し水　同
知足亭晩望の句や落し水　碧梧桐
糯米の黑き彩る落し水　同
棚枯れの糸瓜見ゆるや落し水　同
秋もはやさらば〳〵と落し水　紅葉
小山田や早稻は穗に出て落し水　月兎
湖へ戻る小鮒やおとし水　波靜
げそ〳〵と穴が吸ひ込む落し水　八重櫻
落し水音なくなれる夜明哉　月村
山廊の風のからびや落し水　淡天鵬

落し水

田一枚猶落ちずある水に月　一轉
落し水琵琶湖に入て澄みにけり　小酒
宿引の夕飯時や落しみづ　古泉
寺に居て夜の學びや落し水　梅瘦
高きより水落したる棚田哉　素泉
蛭草に田の錆見ゆれ落し水　幽山
御裳濯の川や神田の落し水　木母
建增して近まさる戸や落し水　青嵐
毛見公事に水も落さぬ外田哉　雲桂樓
落し水別れんとぞ思ふ蚊帳に聞く　玉鬼
水落ちて狐鳴き寄る裏田哉　裸木
水落して夕べの凧の一つかな　折亭
宵月や潺々として落し水　魚鱗
水落す日和に殘る燕かな　飛泉
二番蕎麥咲くや山田の落し水　未央
水口にころぶ田螺や落し水　鵜子
赤藻多き錆田の水を落しけり

落し水あつめて蟲の名所かな　董　湫
落し水鯉一尺に太りけり　作郎
水郷は柳も散らで落し水　一生
落し水音紛れつゝ雨强し　朱泉
谷水の入る田つめたし水落す　泊雲
底拔けの池の尻田や落し水　蘭圃
門を出て十歩に秋の海廣し　子規
大岩の穴より見ゆる秋の海　同
底見えてうろくず居らず秋の海　同
秋の海ばさり〳〵と入日哉　虚子
新道は漁師町なり秋の海　同
繪屏風や司馬江漢が秋の海　月兎
病室や秋の海見るガラス窓　鳴球
砂道や片側松の秋の海　肋骨
秋の海臍まで入りて船を押す　普羅
夕陽の前に帆ひとつ秋の海　山外
白き鳥の群れ居る岩や秋の海　紫人

秋の海

兵船に馬嘶くや秋の海　曉天
初汐や川にたゞよう蔦包　子規
初汐に松四五本の小島かな　同
初汐や千石船の艤　同
初潮に三反ばかり泳ぎけり　碧梧桐
港作る高濱に汐の初めかな　同
碁布の島初汐浪を上ぐる哉　同
初汐や心細くもみをつくし　鳴雪
初汐を汲む青樓の釣瓶かな　同
岸草に初汐滿ちて夕月夜　月兎
初汐に夕陽漂ふ運河かな　同
初潮や鰮の色に海くれて　波靜
初汐や鴉靜まる島の森　同
初汐のみちくる濱を歩きけり　虚子
初汐の打ち上げもせぬ玉藻哉　碧童
初汐にぬらす埠頭の杙かな　小波
初汐や住の江近き船簪　紫影

初汐や百本杭に水騒ぐ　稲青
初汐や島司が積める被け物　徂春
初汐や桟橋近く海老の群れ　望東
初汐に流れもやせん瀬戸の島　青嵐
初汐や露を湛ふる月見草　虚明
初汐や紅顔水にさや〳〵と　龍耳
初汐や埠頭に高き船の尻　守水老
初汐やこゝも鰡飛ぶ木場の隅　松濱
初汐に浦島の子や歸りけん　奇遇
初汐の博多どまりや毛唐人　小酒
初汐や海幸祝ふ一漁村　松濤樓
初汐に浮べる島の宮居かな　其石
初汐や瀬鳴り聞えて出洲遠し　木母庵
初汐や蛇泳ぎ出て戻りけり　泊雲
初汐の磯山松に鷺白し　素泉
初汐に裾を濡らしぞ明石女郎　紫殘
初汐に船着く月の港かな　進琴

秋出水

秋出水九合に觸れて暮迫る　四鶴

高く住む城下の町や秋出水　同

秋出水日晴れて峰に猪子雲　痩梅居

秋出水檐の燈籠は流れけり　同

秋出水ひとり救ひ來て又舟出　俳小星

歌によめる葛飾秋の出水哉　竹の門

秋出水一天晴れて星月夜　松濤樓

葛の葉によるさゞ波や秋出水　佐韋人

秋出水棚の糸瓜に及びけり　孤軒

流れつく馬の屍や秋出水　銀波

出水中高く火焚くや櫨の堤　蛇笏

山門を叩いて告げぬ秋出水　之莊

洪水

洪水や檐の葱に魚遊ぶ　鳴雪

洪水や秋海棠に迫り來る　釜村

水害

水害の年も經にけり年畑　句佛

時候

文月　瀑落て文月の夜の灯かな　鳴雪
文月や蘭省の夜のたゞならぬ　青々
文月や荻の曙・荻の暮　碧童
文月や野分の卷に取りかゝる　波静
紫に光る文月のともしかな　松濱
文月の筆改めて起稿かな　梅痩
文月やほころびそめし歌袋　晋風
文月や客に字を問ふ小傾城　東丘

八月　八月の蝶飛ぶ木曾の木立かな　子規
八月やしけて戻りし珊瑚船　蝶衣
八月や海濃き町に一二泊　南蠻寺

葉月　野良猫の蚤にはなるゝ葉月哉　八重櫻

九月　草木はおよそ白けし九月哉　子蓋

長月　長月や芒の果の海青し　青嵐
長月やあえ菜つけ菜に飯旨き　鬼村

立秋　秋立つ日烏に魚をとられけり　子規
秋立つや瓜も茄子も老の數　同
秋來ぬと柱の拂子動きけり　同
曇れども蒸さず秋立つ日なりけり　碧梧桐
よは〳〵と癇疹過ぎての秋ぞ立つ　同
秋立つや子安詣での花の束　同
秋立つや土踏む人の足の裏　初聲
秋立つや白き花咲く破れ籬　同
秋立つや湖水に映る裸山　同
松陰や雲看る石に秋の立つ　紅葉
食客の病みて秋立つ二階哉　同
日蝕してこゝに秋立つけしき哉　牛伴
立つ秋の市に上るや知らぬ魚　同
竹伐つて秋立つ露にぬれにけり　月斗
立つ秋や枕のさやの白きより　同
萩一叢秋立つ石に日ざしかな　素泉

伸び垂れて秋立つ垣のさゝげ哉　素泉
貧乏に慣れて裸や秋立つ日　紅緑
明近き彗星の尾に秋立ちぬ　橡面坊
秋立つと古妻閨の莫蓙を卷く　蝶衣
潮音應へて山色既に秋立ちぬ　煤六
一桡の白湯に秋立つあした哉　雨六
秋立つやさめし空也が枕上　青々
秋立や酒醒てよべの人戀し　水巴
磨かれて釜に秋立つ光り哉　師竹
墓守の箒に秋の立つ日かな　射石
庭先に病餘の杖や秋の立つ　清流
貧乏の面から秋の立にけり　百里庵
藻刈船秋立つ鎌を鳴らしけり　櫻魂子
秋立つや磯の波音松の風　柿栗
刈込みし桑に秋立つ新芽かな　枕流
桐の葉の穴目に秋は立ちぬらし　孤村
秋立て去年の穴の袷かな　蓁水

梳る髪に秋立つ恨みかな　玉鬼
秋立つや寢覺めてあれば黍の風　蛹魚
星座高う定まつて天下已に秋　雪人
秋立や古き我句の古り勝る　昔人
秋立つや祇園の鐘を閨に聞く　北渚
好き宿に秋立つ今朝や銀襖　村雨
秋立つや黄金が原の朝の露　梅林
秋立つや海を眺むる鶴百羽　照葉
一つ〳〵星に秋立つ光り哉　松灣
曉や蓮の浮葉に秋の立つ　柳里
秋立つや舌に鋭き蓼の味　夢龍
秋立つてひやつく坊主頭かな　柳江
並び居る膝に秋立つ供衆かな　物外
剃り落す眉に秋立つ女かな　焚嵐
踏みつけた蟹の死骸や今朝の秋　子規
棕梠の葉の手をひろげけり今朝の秋　同
のゝしりし人靜まりて今朝の秋　同

今朝の秋

あけに塗る帷子竿や今朝の秋　青々
琵琶函にもたれ心や今朝の秋　同
讀さしの從容錄や今朝の秋　同
けさ秋を青梨賣や粟田口　露石
けさの秋淺茅の露をふみありく　同
佳き作の佛獲てけり今朝の秋　同
今朝の秋露青柴の大文字　握月
大沼の小家や今朝の秋占むる　同
弱法師枕かゝへて今朝の秋　同
常磐木の塵掃く庭や今朝の秋　月斗
今朝の秋殘れる月に汐浴びる　同
買ふて來し馬嘶くや今朝の秋　同
弔旗つるかゝり舟あり今朝の秋　射石
けさ秋や雲仰ぐ僧の眉動く　同
粉小豆を下し劑や今朝の秋　同
今朝の秋もの靜かなる端居哉　虚子
海防の巡邏ありけり今朝の秋　碧梧桐

今朝秋の煤のゆらぎや五智如來　奇遇
一人子を旅だゝせけり今朝の秋　繞石
今朝秋や巷に住みて座敷掃く　石鼎
水中の魚すみにけり今朝の秋　麥人
けさの秋鬼貫の日を繰りにけり　蝶衣
通夜の眼を洗ふ噴井や今朝の秋　竹の門
禰宜の打つ太鼓に立つや今朝の秋　愚佛
けさ秋やもたれ歪みし竹柱　松濤樓
白粥のさめし小鍋やけさの秋　同樂
熱さめし人の拔毛や今朝の秋　疊水
親よりも白き羊や今朝の秋　鬼城
今朝の秋淺間に對す机かな　菫哉
今朝の秋厠の草履落しけり　二星
物書かまほしうなりけり今朝の秋　三華
地に淡き槐の影や今朝の秋　春蘿
透徹す師の說論や今朝の秋　白山
尻高に馬の子飛ぶや今朝の秋　弓月

瘧落ちて藥捨てけり今朝の秋　蛹魚
けさの秋尾上の寺にめざめけり　如雨露
十哲は畫像に活きて今朝の秋　柿園
芋の葉に雨の名殘や今朝の秋　橡面坊
けさの秋須磨の磯屋の眞白帽　西湖
野の黍の穗に引く雲や今朝の秋　櫻魂子
今朝の秋馬士の懐錢二貫　紅蓼
今朝秋の水にごしをる緋鯉かな　裸木
剃り落す夏斷の髭や今朝の秋　伯洲
今朝の秋座頭傾く端居かな　死酒
沼尻に祭る社や今朝の秋　柑子
佛飯を土鍋にたくや今朝の秋　稻水子
運慶の彫り初め祝ふ今朝の秋　水翁
みちのくの野に白馬あり今朝の秋　素涙

秋に入る

草花を畫く日課や秋に入る　子規
障子しめて縫箔の灯や秋に入る　射石
捨白に水澄む春戸や秋に入る　暢矢

初秋

初秋の簾に動く日脚かな　子規
昨日今日はや初秋となりにけり　同
初秋や合歡の葉ごしの流れ星　同
初秋の寺に瓜食ふ連歌かな　青々
初秋の番屋あきけり法隆寺　同
初秋や草の庵の竹火箸　同
おしなべて初秋風の花屋哉　虛明
初秋のほのかに涼し夕月夜　同
初秋の衣桁に伐るや庵の竹　同
初秋や手拭白き丁字風呂　四明
初秋や七里が濱の朝の霧　同
初秋のをりふし須磨の便り哉　鳴雪
初秋や人鹿も見えて鷗飛ぶ　碧梧桐
初秋の雲遠近や信濃川　虛子
初秋や水の都の花火舟　露石
初秋の庭木に映る灯影かな　把栗
初秋の趣味横溢す漫話かな　碧童

初秋の心落付く端居かな　別天樓
鳥蹴立つ汀に秋の來初めけり　青嵐
初秋の田水の匂ひさめにけり　八重櫻
初秋や荃蕙化して茆となりぬ　乙字
初秋や二番刈りする麻所　六花
初秋の雲がかゝるや富士の山　活東
初秋や頻りに動く馬の耳　黄雨
初秋や城へ召さるゝ刀鍛冶　蝶衣
初秋や大蟻つまむ青だゝみ　羽洲
初秋や大浪に畫く佐渡の海　寒山
初秋や双兒生みたる舟の妻　蛇笏
初秋の織屋のぞけば絹白し　櫻魂子
初秋やこゝろにとめる物の味　鼠堂
初秋の煙こもらぬ庵かな　菫菜
初秋の色流れけり朝の顔　壺春
初秋や眞珠養ふ伊勢の海　觀魚
緣の下の陽に向く草や秋初め　素堂

大漁や濱の初秋晴れ渡る　久寶
初秋や竹の梢の朝月夜　雅春
初秋や働けば癒ゆ身の恙　井泉水
初秋や物皆うまき病あがり　一竿
初秋や枕に願をのせて見る　月斗

仲秋

仲秋や雁より高く芦蕉より廣し　虚子
仲秋や芋畑に出て我家の　醉佛
仲秋の獨吟震ふ芭蕉かな　一樹
仲秋やしぐれかけたる湖の空　蘇坤

殘暑

据風呂に殘暑の垢のたまりけり　子規
日の神も御病氣とやら此殘暑　同
晝過ぎの町や殘暑の肴賣　同
馬市に祭控へて殘暑かな　碧梧桐
仕立かへぬ桑まだありて殘暑哉　同
藍を干す莚に殘る暑さかな　初聲
搔掘りて水盡す池の殘暑かな　同
けづりとる草に雨なき殘暑哉　虚子

惠心寺は西に木草の殘暑かな　青々
畑毒に稻田枯れたる殘暑かな　霽月
横町の酢屋に酢を煮る殘暑哉　青嵐
籾すりの臼塗りて置殘暑かな　八重櫻
刈り桑の下葉黃に照る殘暑かな　泊雲
稍荒れて殘暑を拂ふ大雨かな　水巴
島住の水錢かたる殘暑かな　知十
形なき蕗の蟲葉の殘暑かな　山梔子
食ひ過ぎの痢せず腹病む殘暑哉　田士英
燈籠に殘る暑や宵の雨　白月
蔓のみの南瓜花さへ殘暑かな　俳小星
塗師屋弟子漆にまけし殘暑哉　射石
搔きあとを漆流るゝ殘暑かな　師竹
部屋かへて湖見ぬ窓の殘暑哉　死酒
七浦の殘暑を洗ふ夜潮かな　鳳梧桐
溜池の小魚に濁る殘暑かな　活堂
七曇八晴に殘るあつさかな　四子

秋暑し

葉牡丹の卷きつほぐれつ殘暑哉　水翁
鍛冶が戸の日除古びし殘暑哉　不如
大根の蟲に灰撒く殘暑かな　橡面坊
下手に建てし分限笑ひぬ秋暑き　碧梧桐
秋暑し八瀨にとゞまる宣教師　四明
秋暑し芋の廣葉に馬糞飛ぶ　鬼城
白壁に秋の日暑し雲の影　大羽
秋暑しビールの醉の晝寢癖　紫影
濱納屋に秋の暑さや漁具船具　不喚樓
秋暑し雨雲低き山の宿　巴藤
羹にこりて鱠や秋暑き　烏犍
秋暑く夕照雲の黃に沈む　島村
濱苣の藥ともならで秋暑し　零生
秋暑き田に仕舞草とりにけり　西湖
筆草を釣り干す窓や秋暑し　射石
秋暑う氷室の氷盡きにけり　霞山
麻を蒸す釜の焰や秋暑し　榎村

刈麻の又芽を吹きて秋暑し　丹々
胡麻の實のひとり飜れて秋暑し　梅牛
地埃に風なき秋の暑さかな　龍城
熱少しありて散歩や秋暑し　たけし
日限り機藍の匂ひの秋暑し　羊我
禿山の路々見えて秋暑し　笑風
張り下手の障子の波や秋暑き　夏山
遅蒔の豆の實入りや秋暑し　佛丈
秋暑き烟草畑の夕日かな　茶影

秋涼

靈場の秋すゞしさや笈をとく　五工
江聲の一座に落ちて秋すゞし　月村
秋涼し馬乘り入るゝ秋の川　守水老
秋涼し膳所の城下の刀賣　荻聲
秋涼記雁を聞く夜を第一紙　孤軒
蘆に入る舟の灯や秋すゞし　葵洞
秋涼し星飛んで竹に風起る　素圓

新涼に猶愛す蜩の翠かな　露月
新涼の疊の上や紙魚を打つ　同
新涼に加へてさびし油皿　青々
新涼に蘭の葉拭ふ書生かな　同
新涼や書く曼陀羅の墨刎ねて　鳴雪
新涼や竹の戰ぎの眼に見ゆる　松宇
新涼や鴛鴦の一つをいつくしむ　撲天鵬
新涼の燈につゞる紀行かな　愚佛
雲描く人新涼の作意かな　不喚樓
新涼や夕風わたる碧梧桐　眞名文
新涼や欝金畑の露の朝　漂舟
新涼や初穂の稻に風おこる　露花
新涼や門に子馬の尺をとる　十峯
吟骨の新に涼し竹の聲　華兮
新涼や甲斐に生れて晶選び　はじめ
新涼や室の揚屋の片戸ざし　子節
新涼の舟に登れば褥かな　蝶衣

新涼の海見て清き眼かな　久寶
新涼の空仰ぎけり椽の闇　攝村
新涼や花屋が鳴らす濡れ鋏　娟月
新涼や芽生姜をかむ朝茶漬　汲花
新涼の湯漬を啜る病婦かな　黒丸
新涼の鏡に映る灯影かな　寒仙
藪寺の釣鐘もなし秋の暮　子規
向きあふて淋しき顔や秋の暮　同
猿曳は妻も子もなし秋の暮　同
後れたる時計合すや秋の暮　虚子
ものいはぬ二階の客や秋の暮　同
移り來て灯す隣や秋の暮　同
大船のぞろと入りくる秋の暮　蝶衣
錢見せて宿乞ふ人や秋の暮　同
悟れども覺束なしや秋の暮　同
秋の暮飯の半ばに灯よぶ　月兎
鍬洗ふ水に横日や秋の暮　同

秋の暮

秋の暮門ゆく老の獨言　把栗
月遲き谷間の寺や秋の暮　同
一人湯に行けば一人や秋の暮　松濱
船に寢て島の灯繼し秋の暮　同
色このむ我も男よ秋の暮　青々
爺死で婆只一人秋の暮　格堂
干網を下ろせし竿や秋の暮　癖三醉
ふいとした事に家出や秋の暮　稻青
秋の暮水のやうなる酒二合　鬼城
大佛も祇園も同じ秋の暮　椽面坊
妻もたぬ我と定めぬ秋の暮　東洋城
風船の行方や何處秋の暮　南翠
灯ともさぬ辻燈籠や秋の暮　百雷
鳴り止みし野寺の鐘や秋の暮　幽城
室の戸や煙細りて秋の暮　其石
秋の暮淋しき柩通りけり　へき
藪墾きし根で風呂焚くや秋の暮　泊雲

足場解くあとのしころや秋の暮　八重櫻
棹下手の艫下手ばかりや秋暮るゝ　飛泉
雨に鳴く一羽鴉や秋の暮　乙内
打ち振るや德利の既に秋の暮　四緑
勝男木に白鳩一羽秋暮れぬ　晴峯
嘘して門行く人や秋の暮　作郎
我庵をさして誰そ來る秋の暮　醉佛
秋の暮妻なき家に戻るかな　竹雨
心もとなき厨の音や秋の暮　子瓢
よき鴉來鳴て秋の暮早し　鳴雪

秋の夕

聾なり秋の夕の渡守　子規
婆々が來て灯ともす秋の夕哉　同
萩刈りて芒に秋の夕かな　同
うか〳〵と風引く秋の夕かな　虚子
一人なり秋なり更に夕なり　波静
何誹る童謡秋の夕かな　白山
つく〳〵と思へば秋の夕かなへき

宵の秋

土手下れば早や灯る町や秋夕べ　裸木
戸をたてに母家の者や秋夕　未央
破壁に赤き日影や秋の夕　二葉
秋を愛す秋の夕を愛すかな　茶影
山越や六部二人や秋の夕　甲華
病鳥に灯を置く棚や秋夕　竹莊
白き峨の疊に死せり宵の秋　蝶衣
淋しさに灯を明るうす秋の宵　同
檜扇に秋知る宵のとのゐかな　鳴雪
我門に蟲賣の聲や宵の秋　露石
町寺に嫁入沙汰や宵の秋　潯陽

秋の夜

秋の夜や狼煙受つぐ餘所の山　子規
秋の夜の夢に詩を得し寢覺かな　同
秋の夜の宿に臼ひく響かな　碧梧桐
秋の夜や學業語る親の前　同
秋の夜や人誑かす畫魔俳魔　橡面坊
秋の夜の更けて釜鳴る圍爐裏哉　八重櫻

秋の夜やテグスの屑をつむぎ倦む　一轉
秋の夜の灯ふけゝり持佛堂　伯洲
秋既に灯籠ともす夜となりぬ　小蛙
秋の夜や河原の院の北枕　小羊
秋の夜や剝きがさねたる柿の皮　寒村
秋の夜や神爐に佗ぶる古御達　吐月樓
秋の夜の灯影に痩せし女かな　柳川
秋の夜や襖白さに物をかく　城水
秋の夜や更けて冷たき戀衣　茶影
秋の夜や狸木を伐る向ひ山　曉村
秋の夜や捕へ損ねし小盜人　浪子
秋の夜や山氣身にしむ里の鐘　纓水
秋の夜や寢耳に響く水の音　梅桂
秋の夜を破門の弟子の歸參哉　穗耕
秋の夜の獨り溫泉槽を領す哉　埋木
秋の夜や古里しのぶ草枕　石川
秋の夜を芋煮て味噌をする法師　默雨

夜半の秋

誰が家の戸たゝく音で夜半の秋　子規
門閉ぢて人起きてゐる夜半の秋　同
秋の夜半萬葉の戀の歌を讀む　鬼洗
詩意ありて調はぬ句や夜半の秋　同
猫婆の酒に溺るゝ夜半の秋　八重櫻
屋上の風人を呼ぶ夜半の秋　蝶衣
糸切れし儘琴包む夜半の秋　波空
酒醒めてマツチ探ぐるや夜半の秋　玉鬼
かけ直す鼠落しや夜半の秋　魚里
我句よんで我性淋し夜半の秋　たけし
彗星の孤城を壓す夜半の秋　青甌
舍利守る家中の伽や夜半の秋　其川
長き夜や孔明死する三國志　子規

夜長

長き夜や人灯を取つて庭を行く　同
長き夜や堀川落つる汐の音　司
夜長人水車に油さしにけり　夢人
長き夜や宿の座頭の廓話　同

夜長聟十呂盤習ひ勵みけり　雪人
長き夜のあくれば曲る腰の骨　三太
忍び入りし曲者眠る夜長かな　同
長き夜を張り裂くる胸の思ひ哉　同
長き夜の水流れたり大井川　碧梧桐
夜長く燈下に手足伸すなり　同
うと〳〵と俳三昧の夜長けれ　同
床ずれや長夜のうつゝ砥に似たり　紅葉
鼠追ふも秋の夜長のすさび哉　同
つく〴〵と古行燈の夜長かな　鳴雪
眠りては覺めては汽車の夜長哉　同
泊り込む釜師の宿の夜長かな　碧童
さゝやきて尼と少女の夜長哉　同
長き夜を面に眉かく能太夫　句佛
讀まうにも欠けし夜長の双紙哉　同
雪隱に鼠賊を叱る夜長かな　師竹
長き夜を衝立の繪の四睡かな　同

草原に月はたゞあり夜長かな　石鼎
床の花いつまで咲ける夜長かな　同
俳諧に故人を憶ふ夜長かな　虚子
片われの月待ち得たる夜長哉　露月
燭は暗し遊子長夜の雨を聞く　小波
長き夜の鼠嫁入などすらん　紅緑
長き夜の戀に寢ぬ人酒のましよ　知十
長き夜を用うる眠り藥かな　稻青
弟子達の一つ灯に寄る夜長かな　鬼城
夜長さに讀む長谷寺の緣起哉　一蓑
長き夜の水聲樓をめぐりけり　乙字
長き夜や上奏文を草す涙　瓊音
みそか夫の衣かくし縫ふ夜長哉　蝶衣
竹を遶る水や夜長の耳に澄む　竹の門
負債もたぬ家の行燈の夜長かな　月舟
綯ふ繩が尻にうづまく夜長哉　梅痩
縫ひ上げて綿つゞりこむ夜長哉　一露

明日はをる羽織敷寢の夜長哉　櫻魂子
空瓢夜長の壁に影長し　死酒
山の芋の鰻となりし夜長かな　木兎
大釜に絹練る夜長工場かな　醉紅
稀人に御酒後茶を煮る夜長哉　はぎ女
睦言や局々の夜ぞ長き　幽村
すがれ鳴く一つ籠馬や夜ぞ長き　ゆう〳〵
長き夜の壁に影ある拂子かな　射石
妻や子に我が夢移る夜長かな　柑子
身の上を語る夜長の按摩かな　士櫻
紫蘇沁み手いつまで匂ふ夜長かな　零餘子
長き夜をぬけし枕の空氣かな　芳亭
永き夜を廟下に眠る禿かな　一星
錦屑袈裟になるまで夜長人　山樓
夜長人耶蘇をけなして歸りけり　普羅
化け合ふて遊ぶ狸の夜長かな　添水
山黑く圍める町の夜長かな　余子

二百十日

稻正に二百十日の花曇　子規
芒の穗二百十日も過ぎにけり　同
こけもせで二百十日の鷄頭哉　同
風雲を見送る二百十日かな　松宇
二百十日煙り直くなる淺間山　同
堂島や二百十日の辻の人　鳴雪
枝少し鳴らして二百十日かな　紅葉
電信の通ぜぬ二百十日かな　三允
よべ風ぎて二百十日の空青し　泊雲
黃昏や二百十日の笑聲　抱琴
二百十日萩ふく虫を取盡くす　撲天鵬
田主島主二百十日のあくる朝　碧童
降りつゞき二百十日となりに鳧　柴人
雲行や二百十日の人ごゝろ　初聲
一風鳴つて二百十日の眉上る　呂仙
見上るや二百十日の雲一朶　眞名文
佛花に二百十日や小さき花　徂春

風吹くや二百十日の晝の鐘　江南寺

八朔

八朔や田末の丘の霧木立　北涯

八朔や大社の鳥居稻の中　八重櫻

柿栗も饒かに田面節會かな　青嵐

草の戸の赤きは田面人形かな　紫殘

八朔の猫まで白き揚屋かな　活東

鹽鯛も奢りて田面祝ひけり　滕六

八朔や土手の月さす戸無し駕　迂外

八朔を秩父の駒の門出かな　北齋

八朔の酒こぼしけり草錦　晩村

八朔や酒提げてゆく笠の人　子瓢

八朔の稻九穗の祝かな　鵲巢

八朔をそゞろに墨の匂ひ哉　杉外

八朔やつまくれないの花日和　春洋

八朔や漆の匂ふ獅子頭　箕雀

籾倉も建てゝ田の實の祝ひ哉　一守

御地頭の下部醉はせぬ田の實酒　甫山

秋の聲

雀飛んで翼にもあり秋の聲　愚佛

江に近き竹の林や秋の聲　同

瓢簞の東に西に秋の聲　殘花

秋の聲板戸を叩く尾花かな　大羽

絹のべて描くものに竹や秋の聲　裸木

秋の聲問へば答ふるこだま哉　錦朔

山寺や鉦も木魚も秋の聲　木南人

秋氣

秋高く運動會の日和かな　小波

秋高し小さけれども國一つ　百花羞

巖頭に一嘯するや秋高し　彗星

やゝ寒

やゝ寒み灯による蟲もなかり鳧　子規

やゝ寒み机に向ふ背ぐゝまり　同

やゝ寒みちりけ打たする溫泉かな　同

白萩に朝の讀經もやゝ寒う　紅綠

漸寒し池の汀を一と葉舟　秋聲

梢寒の軒にからびし木賊かな　孤軒

やゝ寒の障子の月となりにけり　月斗

やゝ寒や句案の空を渡る雁　桂華
漸寒や障子の穴が風に鳴る　桂山
やゝ寒き雲の彩る湖上かな　桂山
松蔭に御廟の後ろやゝ寒き　快雨
うそ寒や綿入着たる小大名　子規
ひらりしやり一ッ葉ゆれてうそ寒し　同
住み馴れし橋の袂のうそ寒み　同
うそ寒き家に歸りて燭しけり　波静
うそ寒き易者が顔や市の風　同
起き出でゝうそ寒かりし衾哉　碧童
うそ寒や昨日の乙女今日の妻　愚佛
灯ともせど煙草呑むなりうそ寒く　句佛
うそ寒の月に楓橋孤泊の詩　月明
うそ寒し孤城月下り黍の露　橋城
うそ寒や女がもやす宿の風呂　碧浪
城でもつ町ちゃものそゞろ寒ちゃもの　碧梧桐
そゞろ寒
霧雨に素肌のそゞろ寒さかな　同

陸奥の果海の近さやそゞろ寒　碧梧桐
質の利に折る指十のそゞろ寒　紅葉
そゞろ寒猪口の小さきを鼻の先　竹冷
聞說酒屋へ三里そゞろ寒　霽月
病む人の毛衣着たりそゞろ寒　碧童
水かけて願ふ地藏やそゞろ寒　水巴
そゞろ寒酒など買ふて飲もかいな　烏黑
そゞろ寒庚申頃の身の病　泊雲
迷ひなき山路を知れどそゞろ寒　八重櫻
萬象は俳腸に入りそゞろ寒　茂樹
落ち盡す壁畫の箔やそゞろ寒　白楊
肌寒み三十棒をくらひけり　子規
肌寒や湯ぬるうして人こぞる　同
肌寒みくれなゐさむる襦袢哉　同
肌寒し顏子の抱くからふくべ　烏黑
肌寒やみなし子に乳を探らるゝ　靈水
堂の灯や肌寒からむ佛達　白山

肌寒の市に小錢をすられけり　白水
手枕に秋夕ざれて肌寒し　十歩老
ちぐはぐの宿の借着や肌寒き　蘆仙

朝寒

水瓶に茶碗落すや朝寒み　子規
朝寒や紫の雲消えて行く　同
朝寒やたのもと響く内玄關　同
朝寒の鵙啼きあへず飛びにけり　虚子
朝寒の一番興や大井川　同
朝寒や船も下ろさで漁夫二人　同
川船の眞帆の高さや朝寒み　碧梧桐
山中に淹留し朝を寒うしぬ　同
朝寒や柳の下に女立つ　同
朝寒や花屋に人や立咄し　青々
朝寒き貌に日さしぬ渡し船　同
朝寒の汝居ますや膝法師　小波
朝寒の胸ふくらせし雀かな　同
朝寒や窓の下なる鏡立　月斗
朝寒や白きかしらの御堂守　鬼城
朝寒を鳴らして行くや乳の堰　無黄
朝寒う水打際の藻屑かな　麥人
朝寒や松葉も落ちぬ圓覺寺　竹冷
朝寒の水こぼしけり竹簀子　知十
山の影さして野面の朝寒き　碧童
朝寒の濱松原や靄別れ　八重櫻
朝寒や机の下の膝頭　左衞門
朝寒しネブ茶に粥を聞召せ　句佛
朝寒の蟲を掃きけり御垣守　蝶衣
朝寒や豆腐を買に竹の里　寒樓
朝寒や教會の鐘暗きより　俳小星
朝寒や守札賣る禰宜の顏　愚佛
朝寒や赤き實の浮く手洗鉢　大羽
朝寒や絹のかい卷なめらかに　西男
うかと寢て薄き蒲團や朝寒き　奇過
朝寒や銀屏に對す人の息　山梔子

朝寒の水靄上る稲城かな　雪人
朝寒の宿立ちをした古驛かな　蛹魚
朝寒や山の裾行く頬冠り　折亭
朝寒や水に臨みし白芙蓉　三間堂
朝寒や兒に課す論語下に入ぬ　玄耳
朝寒や明けて閉めたる船障子　弓月
朝寒や寢てゐる父に暇乞　濱人
朝寒となりし金魚の尾鰭かな　眉月
裾野行く大峯はれて朝寒き　一樹
朝寒の湖水に銃の谺かな　洛川
きぬ〴〵や朝寒う手を握りあひ　烏上人
朝寒み鰻突刺せば大の赤き　柿山伏
音たてゝ白湯すする媼や朝寒き　はじめ
朝寒の風渡るなり雜木山　二松
朝寒の頭を撫づる和尚かな　綠樓
朝寒や宇治山影を水見舞　握月
朝寒や嵐の跡を庭に見る　北汀
朝寒や刀殘せし小盜人　米生
朝寒や鍋の尻とぐ古女房　丹楓
かまつかの青きもありて朝寒し　たけし

夜寒

朝寒や屠所に曳き行く牛の息　晴汀
朝寒や荷馬仕立つる小提灯　秋溪
夜寒さや家なき原に灯のともる　子規
勤行のすんで灯を消す夜寒かな　同
盜人を柱に縛す夜寒かな　同
通夜堂に夜寒の念佛かすかなり　鳴雪
盜人が壁切る音の夜寒かな　同
馬方の馬にものいふ夜寒かな　同
あこがるゝ一夜は一夜夜寒哉　青々
草臥の枕は木なる夜寒かな　同
煮ゆる待つ鍋に夜寒の思あり　同
青き燈をつけて夜寒の川蒸汽　水巴
炭竈に夜寒の月や松の影　同
浪の音東海道の夜寒かな　同

蔦からむ夜寒の里の薪かな　虚子
寢られねば又灯をともす夜寒哉　同
夜寒人の愛や蕩兒に偏れり　同
宵の間は語りつぎしが夜寒哉　碧童
浦風の障子ゆすぶる夜寒かな　同
行燈も夜寒の様な溫め酒　五工
子のなきを妻が嘆きの夜寒哉　同
曾て診し不審兒に出し夜寒かな　躑躅
波の音今宵は西に夜寒かな　同
寡人の薄着に羽織る夜寒かな　椽面坊
夜や寒き江口は赤き小行燈　虚明
庵は寢て老木の鳥の夜寒かな　巨口
僧は獨り夜寒の鐘を撞きに行く　活東
糸車泣くよに廻る夜寒かな　松濱
草枕思ひ〳〵に夜寒かな　小洒
夜寒さの孤燈にかさす白双哉　彩雲
客去りて蒲團の凹む夜寒かな　柿園

人買の聲を戸に聞く夜寒かな　飄魚
誰やらん障子すり行く夜寒哉　山梔子
夜寒さや我子の寢顔妻の夢　眉月
戸をしめて一と間の家の夜寒かな　鬼城
悪々と夜寒の雨や竹に降る　井花
夜寒さや物縫ふ妻の背ぐゝまり　落魄居
食逃の飯喰ひ足らぬ夜寒かな　江涯
舟呼ば夜寒の灯影動きけり　師竹
木枕に夜寒の天窓ゆがみけり　月波
機音の次第に減りぬ町夜寒　泊雲
聽法の夜寒を膝の痺れかな　紫雲
夜寒さの人は早や寢つ貰風呂　鎭西郎
やぶ寺の猫も法師も夜寒かな　風雨樓
謹まぬ書を積みあげし座右や夜寒の灯　零餘子

秋寒

澁柿は澁にとられて秋寒し　子規
秋寒し眼の光る鬼女の面　同
秋寒き雲が飛ぶなり南部富士　左衞門

秋寒し水足り來るや草の中　裸木
秋寒し富士の寫眞にうつる馬　蝶衣
秋寒き出島の家の灯かな　折亭
關口に芒倒れて秋寒き　霞翠
秋寒き閨守る夜半の灯かな　石人
曉のひやゝかな雲流れけり　子規
家康の魂ひやゝかに杉木立　同
ひや〳〵とうなじかな膝頭哉　同
切り張りの穴冷やかに障子哉　碧梧桐
繪表の蓙を納めぬ冷やかに　同
ひや〳〵と居て樂めど妻子哉　同
大いなる森に這入るや冷やかに　虚子
冷かな小村に高き榎かな　同
羽織着て冷やかならん素足かな　醉佛
顏にあたる蚋冷かに朝の風　初聲
落したる針冷かに光りけり　杉雨

冷やか

冷かな禪味修法の大廣間　彩葉

はゝぎ木の卷に伏目や冬を待つ　柚翁

冬を待つ壁に社中の掟かな　丁川

冬近し今年は髯を蓄へぬ　子規

我庵は蚊帳に別れて冬近し　同

冬近き嵐に折れし鶏頭かな　同

柚の實の鬼面になり冬近し　四明

冬近き佛の花の古びかな　へき

千振は枯れて藥や冬近し　樂南

冬近く犀川橋の瀬鳴りかな　一露

紅葉して柿の木茶屋の冬近し　徂春

藪深く沈める屋根や冬近し　石鼎

冬近き耳に地獄の鐘が鳴る　銀河

冬隣庇に猫の眼を病める　小波

草の家の切干早し冬隣　八重櫻

泉水のみなもと涸れて冬隣　蝶衣

中塗をやう〳〵へ終て冬隣　紫々

桐枯れて淋しき庵や冬隣　龍城

棕梠の木や冬を隣の風當る　古泉
薪木積む越の山家や冬隣　姫水
塔の影地に引く長し冬隣　桂華

秋深

秋深き燈も憂きに細るげな　紅葉
秋深う月も小さうなりにけり　活東
すくも燒く小濱に秋の深みけり　無黃
串鮎や軒ば〳〵の秋深し　握月
秋深し夜毎晝毎砧打つ　獨行
秋深し竹の風ふく俳諧寺　梅琴

秋更

秋闌けぬ百日紅も實となりて　無黃
澁茶賣る媼が峠の秋更けぬ　契月

暮秋

取に來る鐘撞料や暮の秋　子規
月もあり黃菊白菊暮るゝ秋　同
飛んでくる餘所の落葉や暮るゝ秋　同
兒墮胎(こをろ)して痛める女や暮の秋　蝶衣
關守の或日朝寢や暮の秋　同
不景氣を寺もこかちぬ暮の秋　碧梧桐

江北へ鴉が飛んで秋暮るゝ　露月
北山の消息もなし暮の秋　橡面坊
朝寒ぢゃ夜寒ぢゃ秋が暮るゝのぢや　紅綠
さび鮎の一際痩せて暮の秋　守水老
女房をたよりに老うや暮の秋　鬼城
住持訪ふて不作泣くなり暮の秋　六花
土踏めば足喰ふ蟲や暮の秋　雪人
芭蕉青く菊黃に雨す暮の秋　寒樓
史家村の水に舟なし暮の秋　射石
國放の大盜人や暮の秋　魚鱗
杵に負けし臼の凹みや暮の秋　死酒
棚枯の絲瓜水なし暮の秋　柿山伏
銅像の片面錆ぬ暮の秋　梅醉
苔の上を蜂吹かれ歩く暮の秋　花囚
稻舟の底摺る泥や暮の秋　枯木
泰山に魯の小を歎ず暮の秋　六可
草深く訪ふ人は誰そ暮の秋　佐韋人

鹽魚の鹽の腑抜けや暮の秋　不可知

秋惜

枯れて立つ紫苑の空や秋惜しき　香村

星寒き宵なり秋も惜まるゝ　紫雲

比丘比丘尼野寺に住みて秋惜む　孤軒

秋惜む人の後ろの行燈かな　句之都

ホ句好きの柿好が秋惜みけり　飛泉

秋の名殘

鷄頭の傾く秋の名殘かな　子規

一つ家に飯くふ秋の名殘かな　虚子

殘照もなか〳〵秋の名殘かな　麥人

綿の市池鯉鮒の秋の名殘かな　滴泉

紛るゝも思ふも秋の名殘かな　蘇坤

小城下や秋の名殘の道具市　射石

晩秋

晩秋や咸陽に入る悲歌の人　香峰

晩秋の落日速し毬の如　閉寺爐

秋去

柿澁く僧愚にして寺の秋去りぬ　把栗

庭の空秋去る鳥の往來かな　櫻魂子

秋果

秋の果尾上の寺に能の會　虚明

秋盡

錦木は梅嫌は寺の秋盡くる　素泉

行秋

行秋の鴉も飛んでしまひけり　子規

行秋をしぐれかけたる法隆寺　同

行秋を佛手柑の只一つかな　同

行秋に狐つきけり鍛冶が弟子　鳴雪

行秋の天西南に傾きぬ　同

此夕べ秋行浦に何もなし　松宇

行秋の返らぬ浪を見送りぬ　同

行秋や草のおどろの枯々に　麥人

行秋をつめたき雨の降り出ぬ　同

氣壯んに行秋などの何ともな　紅葉

此邊の秋も行くかや嵯峨の奥　竹冷

行秋の句宵紙屑賣りにけり　露月

行秋やのれんつるして峯に家　青々

行秋やあへなくなりし飼鶉　碧童

行秋や喉を拔けたる魚の骨　句佛

行秋は瓢の底に止まりぬ　稻青

行秋を髑髏と語る醫生かな　愚佛
秋行く日誓破りし身を思ふ　蝶衣
行秋や石榻による身の力　蛇笏
行秋や見なれて青き伊吹山　華園
行秋の蜂這ふ笈の佛かな　雪人
行秋や鐘に雨もる寶寺　栗人
行秋を尼となる身の調度哉　孤軒
行秋や牛の尿に枯るゝ草　射石
行秋やよごれて屈く十句集　洛燕居
行秋や杉を伐られし山の相　つゝじ
行秋を六波羅諷す落首かな　圖南
行秋や默つて通る痩法師　一星
行秋や芒刈られし坊主山　死酒
行秋の屋根に鶺鴒のぼりけり　四十雀
玉川の瀨々に秋行く簗の杭　巴藤
行秋や瓢つりたる草庇　可祝
行く秋の懷寒き世帶かな　溪明
水垢に重き水車や秋の行く　香村
行秋や貧に馴れたる處士が妻　菱月
秋行かば行けよと撞きし鐘かそも　鶯塘
行秋の枯林に騷ぐ鴉かな　其石
行秋や握り拳の遺り所　庭司
行秋の我句にうつる情淋し　たけし
いとゞ鳴け蟀も鳴け秋が行く　帆影
行秋のお寺に育つ捨子かな　竹南
行秋の骨見る蘆や夕月夜　溪川
君が吹く笛の穴から秋は行　夕洋
張替し障子の外や秋の行　露香
行秋の海を見て啼く鴉かな　紫峯
行秋や縹渺として水と山　山外
巨石卷きゝれずに蔦や秋の行く　九茂芽
張ゆるむ弓に秋行く心かな　山瀧子
行秋に落選の句を集めけり　涼風
易を點して兌の卦に至り九月盡　子規

九月盡

晝中や石に蟲鳴く九月盡　子規
錦木に置く霜見たり九月盡　露石
庭の墓見えずなりけり九月盡　月斗
立枯の黎も焚かれて九月盡　紫竹
山の背に殘る紅葉や九月盡　喬嶽
瘦鮎に砂嚙みあきぬ九月盡　白藤

人事

秋季皇靈祭

皇靈祭日の丸に柳散る小家　釜村
皇靈祭櫻三葉四葉紅葉して　菫哉
皇靈祭の旗立つ黍の垣根哉　清虛

神嘗祭

馬で來る神嘗祭の勅使かな　別天樓
神嘗や古きを傳へ黑木棚　知十
爾宜寄りて神嘗祭の歌會哉　同樂
神嘗や砧の村の旗まれに　煙亭
秋晴や神嘗祭の村やしろ　閑山

天長節

草の戸や天長節の小豆飯　子規
旭に向くや大輪の菊露ながら　同
灯ともして御影祭るや菊の花　同
着飾りて旗日寒しや菊の花　裸木
風晴れの天長節の往き來かな　同
學校の近くに住みて菊佳節　同
年々に天長節の日和かな　鳴雪
聖節や攻取りし壘の旭の御旗　同
菊日和天皇日和國の秋　愚佛
菊の花匂ふ御稜威の日和かな　同
小鳥啼き紅葉菊松國旗かな　麥人
菊晴れたり天長節の旗の影　同
講堂に杏踏鳴らす菊三日　觀魚
菊の日や舊都に老ひし女官達　同
露しげき萬戸の秋や菊日和　紅露
君が代やその菊の香の長しへに　同
校に登る天長節の晴衣かな　虛子

帽に匂ふ天長節の小菊かな　竹冷
菊匂ふ佳節の餅を分ちけり　碧童
君が代の菊に百官集ひけり　小波
菊の香を天長節の衣紋かな　松宇
旗結ぶ菊の籬も三日かな　琅雲
菊に上和酒に下睦の三日哉　水巴
芝生の雨ゆたかに菊の旗日哉　不喚樓
日高見の國の光りや菊日和　寒樓
天長節日本晴の野山かな　松濤樓
吏とならば天長節の武官かな　風葉
耕稼陶漁皆休む菊の佳節かな　柿園
開墾の畑に小菊の佳節かな　栗村
野も山も天長節の錦かな　孤村
よべの雨紅葉色濃き佳節かな　櫻魂子
蝦夷菊やアイヌのメノコ歌ふらく　初聲
歌へ子等今日のよき日を高らかに　竹泉
菊に座して君が代唱ふ臣二歳　空々

七夕

涕垂れぬ天長節の生徒かな　花叟
港内に溢るゝ旗や菊佳節　城東
大輪の黄菊かしこき節會かな　紅峯
菊の香の四海に溢れ民謠ふ　可成
天長節御苑の鶴の首長し　餘生
聖節や旗結ふ紐の菊結び　水翁
七夕は鳶の聲にて明けにけり　子規
七夕やそこらにあるは禿星　同
七夕の橋やくづれて鳴く鴉　同
七夕や浦の濱ゆふをりて來し　青々
七夕や波に横たふ船の笛　同
七夕や娘を肩に宵歩き　同
川竹の七夕竹の流し竹　鳴雪
七夕を寢てしまひけり小傾城　同
七夕や戈を枕の野は更けて　同
七夕の竹剪る藪や五位の鳴く　虚子
七夕やふりし机に瓜二つ　同

七夕も女の中の男の子かな　松濱
物干や七夕づめの待女郎　竹冷
七夕や牛を飾りて内裏まで　幾句拙
七夕をひかへて露の芋畑　櫻魂子
七夕や室の遊女が棹の歌　蜃樓
竹の風七夕更けし夜空かな　櫻魂子
七夕の竹も田中の娼家かな　射石
七夕や穢多の長者の竹高き　孤軒
七夕や表紙とれたる百人首　三間堂
七夕や戀七年の歌反古　山梔子
七夕や歌讀み競ふ姉妹　絶頂
七夕や戀風が吹く廓町　柯客
七夕や芭蕉人麿一枝に　はじめ
七夕の色紙の色を盡すかな　五車
七夕の竹に少なき色紙かな　百雷
七夕の契りや殘る竹の露　友文
七夕や彩どる雲に暮るゝ山　奇淡

星祭

七夕や萩の扉の祭り物　秋人
鱗雲七夕竹の晝淋し　天郎
三十にしてよめらぬ人や星祭　子規
湯浴して星祭る身のすが〳〵し　鳴雪
石山やさゝぬ小家の星祭　青々
祭る星さだかに見えぬ恨かな　月村
歌の師にあかす戀あり星祭　蝶衣
星祭草の花輪に灯をともす　未央
星祭後宮三十六美人　井蘭
星祭にくき遊女の秀歌かな　甲羽
星祭七分の萩に灯もしけり　櫻洲
蘭燈の露けき宵や星祭　紅雨
星祭端居の妓女と妓王かな　東丘
歌に飽く心耻かし星祭　松濱
歌よみの夫婦の家や星祭　柿園

星合

星合は月落ち鴉鳴いて夜半　子規
雲たれて星の逢ふ夜を哀しくす　露石

何の星の逢ふ夜ぞ餘り數多き　麥人
星合や大内に入る女御車　左衞門
逢ふ星のさゝやき聞かん庭の露　雷死久
星の逢ふ夜とて賑はふ廓かな　野人
星の合ふ頃を柱に眠りけり　紫水
星合をよそに語るや女の童　瓢零
星合や京七口の飾り物　握月
星合の竹枝唄ふて淀の舟　尺蠖
二つ星庵の芒に宿りけり　青々
高殿に眼覺むる夜半や双星　楳園
咣たると跂たると星の二つ哉　逸奇
星今宵手兒名が墓の灯かな　八重櫻
川竹の追善星の今宵かな　松濱
星今宵うれしきものは女かな　光子
星今宵玉江の蘆の水白き　握月
星迎呼び連れて星迎女や小磯まで　鳴雪
嵯峨淋し竹のなぎさに星迎　青々
素麺の水に五色や星迎　露石
蠶終りて桑畑廣し星迎へ　左右亭
羅蓋して出づる王女や星迎　蝶衣
憎らしき雲こそまゐれ星迎　はぎ女
桐の葉に油こぼすや星迎　紫人
星別
曉のしづかに星の別れかな　子規
もう〳〵と牛鳴く星の別れかな　同
雲のさま星別るゝと覺えたり　同
別れ星袖や吹かるゝ白小雲　奇遇
織姫の從者歸りたり流星　洛燕居
曉や星の別れを雨が降る　黑眼子
木がくれに星別れ去る夜明哉　竹甫
星戀
後朝の星や浮世の鐘がなる　句佛
星の戀怪しの雲の絶間かな　湖村
星の戀數ある中の二つかな　秋水
月落ちて浮世の闇や星の戀　丁堂
星契
伊豆の星相模の星と契りけり　鬼水

星契る松の木の間や大徳寺　香村

星の宿

古き硯古き机や星の宿　松濤楼

星の宿露の盛に遊ぶなり　握月

星使

更け行くや西へ東へ星使　青嵐

飛んだのは使の星か天の川　松影

星雨

星の雨或は銀河に身投ずや　烏不關

星

草の戸や弱き柳に女星　青々

焚やめて星拜む夜や磯篝　碧童

飛ぶ星に流るゝ星や七日の夜　月村

黍の穂に高し夜明の妬み星　滴翠

星の竹音なき風に戰ぎけり　一蓑

乞巧針

雪洞を草に置けり乞巧針　臥雲坊

願絲

蓬生に願の糸を夜景かな　青々

故郷に願の糸や白拍子　小洒

語らずに糸も懸けたりうき願ひ　逸夢

打しめり願の糸をかけにけり　鈴太郎

八重葺願の糸の赤きかな　皷竹

黄に赤に願ひ縺るゝ枠の糸　著森

蜘蛛の糸

星祭る顔にわりなし蜘蛛の糸　松濱

紫苑から桔梗に蜘蛛の糸長し　鹿村

庭の立琴

立琴に素麺かゝる庵かな　橡面坊

立琴に羽を磨る白き蝶々かな　蝶衣

立琴に鴉の糞の夜明かな　柴兮

立琴に楸のふれて空音かな　一蓑

立琴の露にしめりし音色かな　豐雅

立琴や一夜にかけし蜘蛛の糸　北齋

立琴や靜かさ破る柱の外れ　松濱

貸小袖

貸して今朝心ときめく小袖哉　鳴雪

夕霧の閨かもしらず貸小袖　青々

銀燭の更けて露けし貸小袖　松宇

硯洗

十年の硯洗ふ事もなかりけり　子規

蓮月尼歌の硯を洗ひけり　蝶衣

御秘藏の硯を洗ふ小姓かな　苔花

俳席の十の硯を洗ひけり　三間堂

硯洗ふや落ちくる水の高きより　月舟
松風や硯洗ふて堂に入る　紅村
硯洗ふ水や芭蕉の下をゆく　弓月
糸萩の流れに硯洗ひけり　蛙人
御子良子の硯洗ふや五十鈴川　曉村
雪信が硯洗ふや萩の花　米青

机洗

門川や机洗ふ子五六人　子規
洗ひたる机洗ひたる硯かな　同
二つある別の机も洗ひけり　青々
晴々と北野の机洗ひかな　橡面坊

梶の葉

梶の葉に硯よびつゝ假寢かな　青々
梶の葉と散るや疊に歌かるた　同
梶の葉の吹かるゝや歌の二面　橡面坊
梶の葉にやゝ書き盡きぬ長恨歌　同
七葉八葉梶を摘み取る朝かな　樂南
わが歌のほのめく梶の葉風哉　櫻魂子
梶の葉に坊主枕をうとみけり　鼓竹
梶の葉と名付し戀の歌集かな　綠也
梶の葉や和歌俳諧を裏表　射石
梶の葉や萬葉假名の筆の艶　嘲月
歌なくて悲しき梶の蟲葉かな　羊水

鵲の橋

鵲の橋に柱はなかりけり　子規
橋もなし鵲とんでしまひけり　同
鵲の橋は石にも成ぬべし　青々
鵲の橋や下行く月の舟　奇遇
鵲の橋よ思ひをはるかにす　青春
鵲の橋踏みはづし流れ星　仙居
鵲の橋も流れんざんざ雨　松月

秋社日

秋社氣晴れて供の奴かな　虛子
桝の市　蝶衣
桝市や月もよせ來る松の上　青々

摩陀羅祭

嵯峨の水くらき怕れや牛祭　四明

牛祭

松明や石に乘つたる摩陀羅神　鬼史
牛祭うき人鬼になりにけり　鱸江
祭文の面の鼻もる摩陀羅神

家苞や鼻のとれたるまたら神　木母
暗らがりに牛ひき出すや牛祭　浩水

神田祭

捨團扇鳳と化しけり樽天王　子規
御祭や神田ッ子にて候と　竹冷

秋祭

祭見に狐も尾花かざし來よ　子規
牛蒡肥えて鎭守の祭近づきぬ　同
一日の祭にぎやかに祭かな　同
お祭や紅葉の中の多武の峯　青々
澁柿の端山の里や秋祭　同
八朔もすぎてうれしや秋祭　月村
化粧して子の顏寒し秋祭　甲山
秋祭大山崎の鄕社かな　紫川

宗祇忌

宗祇忌や花の本訪ふ池の坊　木母庵

鬼貫忌

鬼貫忌心ひそかに面白し　碧梧桐
獨言は家の寶や鬼貫忌　同
少年の發句驚かす鬼貫忌　波靜
鬼貫忌各貧居八句かな　八重櫻
木像に酒あびせけり鬼貫忌　竹泉
鬼貫忌まのあたり聞く獨言　化羊
月二日今宵伊丹の鬼貫忌　半春
鬼貫忌放膽の句を得たりけり　江流

定家忌

定家忌や芒に欠けし月一つ　青々

太祇忌

とかうして蕪村參りぬ不夜庵忌　松宇
桔梗屋に茶の會ありて不夜庵忌　迂外
太祇忌やあわれ一夜の句三昧　曾左運
太祇忌や芙蓉の花の咲てより　花陸
月溪の席畫に題せ不夜庵忌　梓石
筆を嚙む遲吟の人よ不夜庵忌　紅雨
去來忌や柿の梢の寺に會す　虛子
去來忌に帶刀の人參りけり　白山

道元忌

金襴の袈裟着る人や道元忌　蝶哉

西鶴忌

西鶴忌色濃き花を供へけり　綠也
廓の灯見ゆる二階や西鶴忌　同
茶屋に會す若き俳士や西鶴忌　孤村

西鶴忌浮世繪なんど手向けり　折亭
西鶴忌寄るや艶なる女記者　芳亭
俳諧につぐ闘菊や西鶴忌　蛇笏
女郎花床に挿しけり西鶴忌　土星
糸瓜忌や所々の秋の風　青々
芒さして古き忌日の思あり　同
水清みて芒はしろし十九日　盧明
糸瓜忌をたのみなりけり秋最中　同
年々に初顔多き子規忌かな　水翁
糸瓜忌や梨淡くして枯腸冷ゆ　同
天下の句見まもりおはす忌日哉　碧梧桐
萩ちりてさびしき日なり獺祭忌　露石
向上一路こゝに營む子規忌かな　碧童
糸瓜忌に牡丹根分の小話かな　巨口
糸瓜忌や叱られし聲の耳にあり　八重櫻
我老いて秋彌淋し獺祭忌　一蓑
倚り馴れし机に一人子規忌かな　村家

子規忌

子規庵忌ひそかにたのむ一句哉　不喚樓
糸瓜忌や朝顔一つ白く咲く　北渚
この忌日天下擧りて糸瓜の句　彩雲
糸瓜忌や發句讀む我は人の屑　乙字
鷄頭に淋し糸瓜に悲しうす　山梔子
糸瓜忌の鶯横町月夜かな　樂南
生前に逢はざりし悔や獺祭忌　蛺魚
百中の一句を賴む子規忌かな　鵜平
糸瓜忌や芒にくもる眼拭く　鼓竹
糸瓜忌や同じ畑の句同人　活堂
母の喪に籠り居る身に子規忌かな　呂杣
子規鬼貫太祇秋の三大忌　緣水
世を擧げて清新の句や獺祭忌　鶯池

紅葉忌

錦する草に小雨や紅葉忌　麥人
江戸前の魚は膳に紅葉忌　望東
輕卒に句を吐く勿れ紅葉忌　片水
十千萬忌百の珍味を供へけり　眞名文

文珠會　文珠會や貧者の中の鳩の杖　蝶衣

施餓鬼　施餓鬼舟はや龍王も浮ぶべし　子規

門前の川に灯ともす施餓鬼哉　同

水の音施餓鬼凉しき灯影かな　同

落る日に川筋さびし施餓鬼舟　五工

一靈に一經流す施餓鬼かな　同

ひるがへる施餓鬼の旗や大根畑　八千溪

竹林の深き處に施餓鬼かな　青々

施餓鬼棚陽炎長くたちにけり　菫哉

御佛にまかせたる身を施餓鬼かな　潛樓

野施餓鬼や蟲の葬に梵字杭　青嵐

川施餓鬼果てゝ柳の月夜かな　眞名文

橋守の世話やき顏や川施餓鬼　香墨

人を呑む難所の濱に施餓鬼哉　活堂

濱風や施餓鬼の灯消えんとす　羽風

川波や施餓鬼の供物打上げし　一竿

荒海に向けて設けぬ施餓鬼棚　秋溪

六道詣　赤裏に老の六道詣かな　樂齋

三井詣　舟でつく人ほのめくや三井詣　碧梧桐

大津繪の店のともしや三井詣　同

柿提げて仁王の前や三井詣　碧童

六齋　六齋はいづこの露と寢るやらん　青々

六齋の一人は鳥羽の狐かな　同

六齋や提灯かくる鳴子繩　石榴

六齋の太皷ぬるゝや萩の露　尺蠖

地藏祭　地藏會や紙治小春が墓の花　青々

灰山やこゝに花さす地藏盆　同

地藏會を守る夜の薄き蒲團哉　同

地藏會や線香燃ゆる草の中　虛子

地藏會や漏斗を据えて賽錢箱　泊雲

葛の葉に行燈くろし地藏盆　巨口

地藏會や眉相似たる尼法師　竹泉

四五軒の油あつめて地藏盆　竹後

追分の地藏を守る二村かな　曾左運

地藏會や南瓜煮て喰ふ草の宿　十二星
草花をあつめて地藏祭かな　影人
鼻缺けの地藏起して祭けり　雁來紅
草の雨地藏祭は流れけり　古丘

盂蘭盆

盆過ぎの月明かに雨の音　子規
盆過ぎの小草生えたる墓場かな　同
石摺をかけて盆蘭の花貢なり　同
親一人子一人盆のあはれなり　漱石
孟蘭盆や夕月低き京の町　雪郎
月蝕の夜に當りけり孟蘭盆會　山外

盆市

盆市や文箱賣行く祇園町　一浪
供連れし比丘尼も見たり盆の市　蘆角

草市

草市や柳の下の燈籠店　子規
草市の草しぼみたる日向かな　同
草市や燈籠白き夕間暮　同
草市や草の武藏の月も今　鳴雪
草市や燈ろう買て眠たがる　青々
門前の草市の夜や雨催ひ　碧童
初ものゝ匂ひも嬉し草の市　松子
草市や三更過ぎて人まばら　松香

迎火

迎火や墓は故郷家は旅　子規
撫子に迎火映る小庭かな　同
迎火や父に似た子の頬明り　同
迎火に魂やくる道の鳴飛んで　鳴雪
風が吹く佛來給ふけはひあり　虚子
猿曳の迎火焚きに戻りけり　碧梧桐
迎火の自からまた燃にけり　露月
迎火の借家きたなき戸口かな　格堂
迎火や折からの雨の淋しさよ　露石
迎火の消えなんとして人の顏　肋骨
迎火や都の中の草の原　花浪
迎火の淋し七影七姿　青嵐
迎火を焚く錦木の門邊かな　水巴
迎火や母と子の住む古隣　古皇

迎火を焚かぬ隣の宗旨かな　荒井蛙
迎火の火影の屆く障子かな　鵲巣

門火

玉菊の姿見送る門火かな　快川
家の子の見る影もなき門火哉　紫殘

送火

送り火やかくて淋しき草の宿　盧子
送り火や母が心に幾佛　同
山路來て町の送火うら淋し　霧月
送り火を焚けば白鷺飛ぶ江哉　同
送り火のかよわく燃ゆる苧殻哉　守水老
送り火や暮れて雨降る宿場町　繞石
送火や煙につゝまれて蟬失せぬ　正茶
送り火の果つれば草の匂ひ哉　小酒
送り火や土の匂ひの染む心　菫哉
送り火に傘さしかくる小雨哉　松濱
送り火の煙は細し雨の中　碧雨
送り火の燃えあがりけり門の闇　蘆仙
送り火の名殘りに草の嵐かな　小百姓
送り火のほの見ゆ黍の小家かな　梅瘦

苧殻

燃えさしの苧殻たゝくや俄雨　霧月

麻柯箸

夕より麻柯の箸は盆の上　古泉
交りは麻柯の箸を供へけり　巨口

蓮飯

蓮飯を焚て淋しき持佛かな　久女

魂待

魂待の犬も數なる戸口かな　松濱

魂送

魂送して行燈の陰に居る　水巴
魂送して掃出す座敷かな　牽牛

送行

送行や松窓行几名を題す　青々

靈祭

草の戸や月明かに魂祭　子規
聖靈の寫眞に憑るや二三日　同
靈祭蜩鳴いて夕なり　同
精靈もさらば〳〵を芒かな　巨口
戰場にそふて小家の魂祭　同
舟人の魂祭る火や荻の中　把栗
魂祭る隼人の家の弓矢かな　蝶衣
托鉢のさて來る事よ魂祭　田士英

御供物の食はれぬ柿も靈祭　梅尺
魂祭る思ひ寢淺き日數かな　活堂
瓜茄子飯の白さよ魂祭　蒼刀
蓮の葉に繪蠟流れて魂祭　破笛
過去帳の知らぬ名問ふや魂祭　十二星

魂棚

魂棚の飯に露置く夕かな　子規
魂棚の後ろは秋の夕かな　古泉
魂棚の三文蠟や草の花　雨六
蚊帳つれば魂棚の燈のありどころ　たけし
魂棚に導き申す灯かな　羽山
魂棚の前に覺めたる夜半の夢　歸蘆園

棚經

棚經や日頃親しき齋の家　六花
棚經に學寮の僧たのみけり　同
棚經や小僧面白さうに讀む　子規
棚經に犬吠えかゝる山家哉　霽月
棚經に定まりの布施包みけり　柳家
棚經に家内居並ぶ佛間かな　蘭一葉
棚經の後ろに座る小供かな　山市
寺三つかけ離れたる墓參かな　碧梧桐

墓參

櫨寺の墓にも詣るゆかりかな　同
つゝましく祖先に篤き墓參哉　同
御墓參や御供一人花芒　虚子
墓拜む人の後ろを通りけり　同
墓參世に忘られし君を泣く　五工
母に肖し道つれ人や墓參　同
北山や墓參して訪ふ伯母の尼　蝶衣
先考の罪に座す身や墓詣　同
家族從者十人ばかり墓參り　子規
仇めきて墓參とし見えぬもあり　紅葉
墓拜むうしろに高き芒かな　鳴雪
よき花に心つよしや墓參　露月
詣りたる墓傾きて芒かな　碧童
墓參草に繪蠟の流れけり　虚明
墓參道石屋に隣り花屋かな　句佛

一僕の草とりて待つ墓參哉　撲天鵬
憎みしが畏敬の念に展墓かな　橙黄子
草の花墓狹きまで手向けたる　榎村
野良犬がついて來るなり墓參　寅日子
一門の皆着飾りて墓參かな　禾黄
うつくしき女一人や墓參　柳渚
末の子の小さき墓に參りけり　爲王
傾城の丸髷淋し墓參り　かすを

生身魂

生身魂その又親も達者なり　子規
驛路に親子かせぎや生身魂　青々
生身魂儒家に生れし身の不肖　白山

御難餅

御難餅宗論好きの主人かな　冷火

大文字

大文字や北山道の草の原　碧梧桐
大文字の消えてぞ月の東山　露石
大文字の火や闇夜なる眞如堂　虚明
ともらじと思ふ雨夜を大文字　句佛
三條の橋の暗さや大文字　春雨

攝待

雨雲の比叡にせまりて大文字　蘆伊
照りはえて旗雲赤し大文字　梧月
夕されば付木に露や大文字　握月
丈山の閨照しけり大文字　雪溪
大文字の夜を泣く鷄や銀閣寺　樵村
攝待の施主や佛屋善右衞門　子規
攝待や芝居のやうな小順禮　同
攝待のむすび食ひつゝ別れけり　同
雨の日を草鞋攝待したりけり　虚子
攝待の剃刀を取る夫婦かな　同
攝待や結びにしたる小豆飯　同
攝待や山門聳ゆ段の下　碧梧桐
攝待の主が慈悲の面かな　同
高札の面のとほり攝待す　同
攝待や手桶にかゝる幕の裾　句佛
攝待に絶家供養のちらし哉　同
攝待や落後の僧のものがたり　鳴雪

攝待や扇忘れて引返す　松宇
攝待の渡舟に乘りし一人かな　碧童
攝待は萩の花さく門べかな　別天樓
攝待や兒が重ねし掌　奇遇
攝待や人の後に立ち盡す　月兎
後人に攝待の粗忽謝しにけり　栗川
千人の攝待すみて夕日かな　波靜
攝待の醉發したる馬上かな　竹の門
攝待の釜が或夜を鳴りにけり　里靜
攝待や捨石におく旅合羽　迂外
攝待の茶釜光るや軒の下　鴎州
攝待の茶に御詠歌の報謝かな　掬童
攝待や緣に脫ぎたる法の笠　公子樓
攝待や日影に廻す掛床几　伯洲
攝待や嗟來に踵返へし行く　溪水
攝待の庭に築きたる竈かな　籟城
攝待や野守が妻の志　湖月

門茶

門茶釜芒の夕日せまりけり　裸木
雀戻りくる夕暮の門茶かな　同
道の記にしるす門茶や歌一首　華園
寺二つ三日營む門茶かな　同
椎一木蜩鳴いて門茶かな　碧童
行人に門茶ある家敎へけり　橡面坊
再建も久しき寺の門茶かな　句佛
萬五千日々三千の門茶かな　奇遇
門茶ある行拔寺の玄關かな　雨々
梵論一人あちら向き居る門茶哉　醉佛
行客の水さしてのむ門茶かな　守水老
端近に女座らせ門茶かな　迂外
黍ひいて跡に設くる門茶かな　水棹
巡禮に門茶惠めは詠歌かな　孤軒
幕古き御朱印寺の門茶かな　青崖
旅僧の頂いて呑む門茶かな　蘆陽
萩寺の木擔ひ來る門茶かな　若翁

燈籠

松の風門茶の釜にとろ〳〵火　蓼雨
燈籠さげて橋行く人や水の影　子規
燈籠二つ掛けて淋しき大家哉　同
淋しさは燈籠かけたる二階かな　同
大船の舳に魂を呼ぶ燈籠かな　碧梧桐
幢幡の錦ぞかゝる繪燈籠　同
閑談の燈籠の灯の細りけり　同
鑛山の入らずの口に燈籠かな　八重櫻
大徳の亡き跡明き燈籠かな　同
顧の流れや燈籠遠まさる　同
提げて行く燈籠ぬれけり傘の下　鳴雪
夢に見し雄々しき顔や盆燈籠　同
寺町の花屋が軒の燈籠かな　青々
蜑が里宵の燈籠に潮がさす　同
七浦や七里法華の盆燈籠　碧童
須磨寺の燈籠や海は闇の中　同
燈籠の繪に媚びて飛ぶ蟲淋し　子瓢
死期を知りて燈籠嬉し枕上み　同
裏戸から蘇秦が歸る燈籠かな　格堂
海樓の岩打つ浪に燈籠かな　乙字
燈籠見に町へ歩くや草の妻　蝶衣
夜嵐や燈籠に樹の露をうつ　蟲水
陸奥に歸りてともす燈籠かな　不喚樓
紅閨の秋思に暗き燈籠かな　松濱
燈籠や瀬枕にとまり〳〵流る　泊雲
雨の夜は下ろして軒に燈籠哉　木母庵
燈籠に書して三五の梵字かな　觀魚
新墓の雨に淋しき燈籠かな　霞山
植込の深きが中の燈籠かな　五工
淋しうてなつかしきものは燈籠哉　巨口
高汐に灯す浦家の燈籠かな　菫村
水村や盆燈籠のゆらぐ見ゆ　昌翠
燈籠の油盡きたり椽に月　桂華
誰が爲めに流人が灯す燈籠かな　杏堂

燈籠は七草ばかり模様かな　烏堂
牡丹彫り櫻も刻む花燈籠　英玉
御佛の影重なりし燈籠かな　三間堂
山國や燈籠をつゝむ不時の霜　桃孫
燈籠に親みなくや草の虫　峰雪
方丈の西の端に吊る燈籠かな　月波
燈籠や出水の丘に家一つ　花星
日の入や星のあたりの高燈籠　子規

高燈籠

瘦村やひつそりとして高燈籠　同
一つづゝ星はくもりて高燈籠　同
吊り上る高燈籠や雨の杉　鳴雪
高燈籠松の梢の片明り　鱸江
高燈籠余吾の草屋に假寢かな　巨口
高燈籠鹽燒く里の松一木　柚翁
翠嵐に加茂の暮色や高燈籠　靜波
屋の内に切籠をともす嵐かな　子規

切籠

西廂は人あらなくに切籠かな　鳴雪
しだり尾の切籠さげ來し秋の中　碧童
赤きもの山家の一つ切籠かな　不喚樓
松の雨切子燈籠の片濕り　水巴
やうやくに見ゆる切籠の墨畫哉　紫雲
月明く疊に影す切籠かな　松濱
美しう霧吹き入るゝ切籠かな　はぎ女

走馬燈

走馬燈囃せばいよゝ廻りけり　鳴雪
走馬燈下に惟然と子供かな　同
醉眼の況や廻り燈籠かな　同
池の上に突き出て廻る燈籠哉　村雨
山の溫泉の高き二階や走馬燈　同
同じ事を廻燈籠のまはりけり　子規
子は寢ねて消ゆるに任す走馬燈　句佛
青樓の禿溜りや走馬燈　守水老
大津繪を賣る家並や走馬燈　魚鱗
提げて行く廻り燈籠の廻りけり　孤峰
木屋町が水にうつりし走馬燈　著森

父心我と微笑むや走馬燈　雉子郎
走馬燈見る〳〵夢に入る子かな　嘯月
月の夜や廻燈籠の影廻る　王城
灯す火に廻りそめたる燈籠かな　健哉
繪襖の繪にさす歌や走馬燈　不羈
落武者と追手と廻り燈籠かな　吟朗
雨雲の月をかすめし踊かな　子規
なまぐさき漁村の月の踊かな　同
紛れ入る狂女も共に踊かな　同
踊るべく人集りぬ夕堤　鳴雪
西廂は人あらなくに踊かな　同
足をかう手をかう首をかう踊れ　竹冷
村夫子の盆じゃ〳〵と踊ける　同
月出で〻鬼もあらはに踊かな　碧梧桐
見て過ぐる四條五條の踊かな　同
衣手の露わびしらに踊りかな　碧童
晴れやかに踊納めをしたり鳧　同

萩芒ありやさこりやさと踊哉　青々
踊子をまちぬる葛のうら戸哉　同
踊見ると云ひこしらへて出に鳧　麥人
そこ〳〵に夕餉たうべて踊かな　同
亡き母の警め知りて踊りけり　南燮寺
わざと淫らに踊りて見すや旅人に　同
草の月ふけて淋しき踊かな　把栗
人暗く月明かに踊かな　同
萩となびき芒と招く踊かな　鱸江
張り上げし音頭につる〻踊かな　同
二組の踊二輪になりにけり　八重櫻
暫しのいて顔さましたる踊かな　同
踊の輪人を圍みて興じけり　孤軒
四五人や踊り疲れを草に寢る　同
踊り子や雨に崩れて萩の宿　松濤樓
踊り子や露けさはさむ額髮　同
たのまれて今日も踊の音頭哉　無黃

少將も虎も出て來る踊かな　霽月
踊子のかどわかされて見えぬなり　三允
寄る波にくづれかゝりし踊かな　乙宇
月落ちて磯風寒き踊かな　菱花
そら解の帶も結ばで踊けり　楸邨
三つ拍子五つ拍子に踊かな　觀魚
一しきり女の多き踊かな　竹の門
露に更けて踊の袂重げなり　初鹿
踊場に廣き庭とて借られけり　子瓢
踊の輪ひろごり過ぎて崩れけり　水棹
ぬかるみに月ふみ付て踊かな　鳳羽
憂き人と肩擦り合はす踊かな　曉村
草の月足袋ほの白き踊かな　木母
提灯に海を照らして踊かな　月舟
踊果てゝ月の松原人歸る　猿男
踊りの輪こゝにも出來ぬ塔の月　泊雲
下村へ葛の戸出づる踊かな　蕉泉
踊場や最負〳〵の釣りともし　榎村
花笠を眞深に冠り踊りかな　遙水
月更けて踊納めの音頭かな　躑躅
磯砂を踏みかためたる踊かな　俳小星
濱すぎて松原越へて踊けり　杏花
七濱や踊拍子に松の風　汀月
壬生の里稻の月夜に踊るなり　華村
そと闇を拔け出て二度の踊哉　紫殘
阪道の踊りにくきを踊りけり　春人
踊子や桔梗の蕾秋の露　彩雲
濱納屋の藻匂ふ風に踊かな　不喚樓
女房もなくて身を古る音頭取　石鼎
思ひ寢の夢に浮びし踊かな　苔雨
齒を染めて交り兼たる踊かな　溪水
つと入や門徒の佛間踊けり　六花
つと入や椽白々と足の跡　同
つと入や夕を限り鎖しけり　碧蕉

衝突入

つと入を睨む達磨の畫像かな　無黄
つと入や犢の如き門の犬　若翁
つと入や松の間過ぎて櫻の間　弓月
つと入れば一室伊唔の聲高し　三寅
つと入の替へていにたる木履哉　三咲
つと入てはじめて見たる娘かな　眞名文
つと入やさら〳〵と碁を崩す音　北齋
つと入れば病める人ある一間哉　冷火
つと入の長者が家に落首かな　蜃樓
つと入の鸚鵡に誰何せられけり　梅瘦
峯入に戀する子あり秋の山　青々
峯入の筋道風の芒かな　可全
鳥放つ功徳に老の涙かな　松濱
放生やあるは盲龜の浮沈み　同
放生のしまひ渡しや夜の水　青々
放生を見ての淀野や女郎花　同

放生會鳥居の外に上蔦達　碧梧桐

逆の峯人

放生會

放生會赤き小魚も交りけり　巨口
放鳥や四山の紅葉まだ早し　竹美
放生や値ひの安き鳥の幸　守水老
放鳥や路傍道說く盲人　栗川
落つる日にホロ〳〵と鳴ぬ放ち鳥　丁々
放生會伏見わたりは夜霧かな　尺蠖
傾城が文に見えたり放生會　如雨露
有職の人の忌日や放生會　秋菊
放生會果て〻淋しや松夕日　松圃
放鳥會べに紐かけて雀籠　鬼城
ふるく飼ふ女夫の鳩も放生會　皷竹
放鳥や秋の空澄む鳩ケ峯　句仙

夏書納

母ともに夏書納や長等山　青々
尼どちや夏書納めて物を縫ふ　皐村
野の宮に別れの君の寢覺かな　青々
後雛は佗しきものよ冷かに　孤軒
白酒に代ゆる新酒や後の雛　同

野の宮別

後の雛

山里や後の雛に手打ち蕎麥　孤軒
年弱や後の雛を初雛に　鳴雪
秋風に倒れてかなし後の雛　虚子
菊の香や襖明ければ後の雛　竹冷
菊の灯に仄見ゆるなり雛の顔　松宇
後の雛起居に菊の匂ひかな　春沙
後の雛新酒に醉はん古き戀　五丈原
下京の花屋二軒や後の雛　月隣生
折添えし小萩の花や後の雛　翠華

秋の雛

花添えて見ても淋しや秋の雛　袋蝶
秋の雛子は宵に寢てしまひ鳧　小柯
繪屏風の亂菊もよし後の雛　公子樸
秋の雛笏も冠もなかりけり　黒丸

後の藪入

やぶ入の子を窺ふや萩すゝき　青々
柿喰ひに後の藪入したりけり　榎村

二日灸

二日灸すえて匈奴の秋を擊つ　青々
雖に秋風入りぬ二日灸　同
二日灸墨ぐる〳〵と芙蓉にも　同
狐つきの泣くなり秋の二日灸　虚明
二日灸芒の風のあふぎけり　竹後
馬は肥ゆ人には二日灸かな　烏犍
鬼灯を持たせて二日灸かな　梅溪
二日灸尾花で灰を落すなり　王木
肩ぬけば秋の山かな二日灸　烏啼
身の老や竹八月の二日灸　闌有

後の彼岸

お萩くばる彼岸の使行き逢ひぬ　子規
山吹の歸り花見る彼岸かな　同
梨子腹も牡丹餅腹も彼岸かな　同
閼伽桶に萩散る後の彼岸かな　折亭
彼岸會や萩寺かけて六阿彌陀　芋之助

秋の彼岸

餅の名や秋の彼岸は萩にこそ　子規
お萩腹秋の彼岸の暮れかゝる　句佛
波の如き雲見る秋の彼岸かな　董湫
雨淋し秋の彼岸の萩の餅　晴汀

黄昏に嚇と照る日や秋彼岸　裸木

重陽

重陽や熨斗目暑かる城の衆　鳴雪

九日や歌に菊なき其の昔　同

菊の日や冬帽買ひに神田まで　同

重陽の風雨に菊を起しけり　橡面坊

菊の園九日の小袖着晴れけり　蝶衣

詩を以て九日の菊に盟ひけり　百花蹇

菊の日を氣晴れて遊ぶ都人　秋皎

高臺に九月九日を知ろしめす　烏堂

菊の日や儒服まとへる美少年　芋村

菊の日は祖父を圍みて語りけり　醉紅

重陽や古壁に菊の詩を題す　擔月

秋草の花環ときめく九日かな　馬洗

重陽の七絶の詩や客に和す　四宵

菊節句

菊の節士人が簞食壺漿かな　田士英

七子八壻菊の節句の團欒かな　十框

重藤の弓に塵なし菊節句　櫻魂子

胡籙に菊挿す陣の節句かな　師仁

下京や金屏たてゝ菊節句　一聲

開園や猗頓が菊の節句かな　紅雨

菊酒

菊の宴蘭の主も侍りぬ　青嵐

菊の日を嬉しと切るや酒の封　醉佛

妹は論語よみけり菊の酒　虚明

菊酒の素燒色はゆ瓶子かな　柑子郎

菊酒や醉ふて局の前渡り　鹽村

太刀佩いて舞ふ女あり菊の宴　史仙

菊の香や傾けつくす大瓶子　紫雲

菊の酒登第の友を送りけり　竹南

菊膾

尙くは饗けよ屈子に菊酢和　鳴雪

山里に飢を助けつ菊膾　青々

山厨の富や栗飯菊膾　紫影

菊膾三閭太夫が卯酒かな　翠濤

菊膾越の旅寢の節句かな　辰生

饗宴の灯に飛ぶ蟲や菊膾　蛇笏

菊膾俳諧の數子洒落なり　旭水史

菊合

勝れたる歌の法師の黄菊かな　幽山

勝菊に面上げたり老舍人　青瓢

菊合敗者に課する詠歌かな　穆堂

勝菊に短冊結ぶ采女かな　湖月

菊合終へて宵月かゝりけり　迷雲

菊襲

菊襲殿上月のほのめくに　鳴雪

此朝や化粧すゝろぐ菊襲　樂南

高きに上る

菊折て高きに上る旅情かな　碧梧桐

高きに上る怡々として父老哉　同

懷抱を高きに上り語りけり　同

登高に菊の主人の案内かな　青々

日を浴びて高きに上る素肌かな　馬洗

海蠃打

海蠃打つや團栗の組柿の組　青嵐

海蠃打の相のゝしりて別れ鳧　同

海蠃打の今年も同じ仲間かな　波空

彼去つて我が天下なり海蠃廻し　同

二つ三つ磨りたるばいを袂かな　鹿語子

打ち合ふて且つ打合ふやばい二つ　同

海蠃打や十五の大人交りをる　碧梧桐

海螺三つ觸ては彈く巴かな　醉佛

長が子の長き袂やばい廻し　著森

強ばいの他を打ち出して澄にけり　桂華

觸れ強きばい二つ澄む挑みかな　孤軒

有るが中に強ばい探る袂かな　案山子

海蠃打ちや庵の裏を拾ひ去る　未央

負ひし子の沓いつ落ちし海螺廻し　柑子

彈かれて海蠃鷄頭を越えにけり　傘車

朝茶の湯

朝茶の湯客は七事に足らざりし　蘆丸

夜學

夜學して四十に近き白髮かな　青々

葛菓子を夜學の賃にうつくしや　同

夜學子の心汲み得て老師かな　雉子郎

快心の書に燭を繼ぐ夜學かな　鱶洲

かりそめに病む師に閉ぢし夜學かな　花囚

大梁の客各々の夜學かな　柴人
夜學校の窓下靜かに通りけり　裸木

水見舞

水見舞來て鳳仙花憐めり　雪人
舟で行く出水見舞や稻光　飛雪
水見舞軒端の桐に舟つなぐ　如雨露

竹床几

月の露人なくて冷ゆ竹床几　月斗
若竹のそれより青し竹床几　同
草花に竹の牀几や置さらし　蓍羽

花火

兩國の花火聞ゆる月夜かな　子規
木の末に遠くの花火開きけり　同
淋しさや花火のあとを星のとぶ　同
揚花火競ふ斗綱のあたりかな　月斗
空に花火水に泗濱の浮罄有　同
暮るゝ秋のそら冷まじき花火哉　同
水鄕は花火の秋となりにけり　青々
露けしや花火の火おく草の中　同
濡竹を假の泊りや花火船　同
遠花火音して何もなかりけり　碧梧桐
洲に渡り隈なき花火仰ぎけり　同
海の月花火彩どる美しき　同
遠花火嵐して空に吹き散るか　虛子
花火見や舟たづね吠ゆ水の犬　同
曉の草に鴉や花火殼　同
花火うつる杯中の酒飜れけり　雪人
花火見ゆる處蕎麥屋に客三四　同
花火あかし荒まさりゆく水驛　露月
四五本の花火あがりて旅情哉　同
晝花火消えて殘れり白きもの　碧童
雨淋し花火ある夜のなき夜哉　同
水を求めて蛟龍降る花火かな　蝶衣
花火盡きて潚湘闇に靜かなり　同
踊見の人後に鼠花火かな　菫哉
草の露よべの花火の筒二本　同
雨來らんとして頻に揚がる花火哉　紅葉

晝花火雲の通ひ路吹とぢよ　鳴雪
兩國の川を失ふ花火かな　竹冷
泣く子抱いて尙花火見る黍の闇　子瓢
散るや花火人のなだれの其中に　松宇
花火止みて川波秋の響かな　五工
花火消えてあと薄煙月夜かな　知十
歡迎の花火の役が當りけり　句佛
燦爛と花火落ちけり湖の上　青嵐
知る人の顏に消えたる花火哉　麥人
水鄕に美を盡したる花火かな　奇遇
山の方へ鳥みな逃げし花火かな　桐南子
ゆり落す線香花火の火玉かな　乙宇
盃の上に開きし花火かな　紫人
大花火田每の水に映りけり　水巴
晝花火第一發の響かな　寒山
深川の闇へ吹かるゝ花火かな　松濱
胡麻叩く秋酣や遠花火　蛇笏

花火ちるやなほ餘りある星一つ　龍耳
闇に蒔く銀砂子あり遠花火　木母庵
松原の虛空より降る花火かな　寒水
揚花火吉田女郎衆は二階から　孤軒
公達の花火見玉ふ御船かな　嵐江
邯鄲の少年花火焚きにけり　山外
花火見ゆる座に移りたる主客かな　九品太
横向きに落つる花火の達磨哉　小篁
つゞけ打花火四山に響きけり　錦村
揚花火闇に聳つ湖山かな　風梧桐
朝花火雲より雲へ響きけり　鷄頭
鐵枴を後に開く花火かな　郊外
籠枕花火に頭斜にす　蘇庵
消えんとす花火又鳴る火尻哉　紫樓
花火上るや草履に近き水たまり　呂杣
大關と大關と組む角力かな　子規
憎まれて見にくき顏や角力取　同

相撲

四つに組んで最負の多き角力哉　子規
旅角力末の松山打て行く　虚明
浦々に別れて行くやすまひ取　同
たのもしき關ともならで小唄哉　同
角力取草の枕に身を愛す　青々
深草や露に傘かる角力取　同
夕月や團扇かたげて角力取　同
兩國の橋ゆすり來る相撲かな　櫻魂子
結ぶ程になる小角力の髻かな　同
一段と關か念やる角力かな　同
小相撲やかくても師の名惜みけり　碧梧桐
花芒歸參かなはぬ角力かな　同
小相撲の瓜を枕に寢入りけり　普羅
江戸相撲田舍の宿にあふれけり　同
砂濱に潮まつ漁父が相撲かな　蝶衣
角力取入りて溢るゝ宿の風呂　同
腰の弓絞る相撲の力かな　雪人

關三代力士鑑に殘りけり　同
小角力の雨詑しらに炊事かな　竹冷
年寄の顧で分けたる角力かな　小波
弟子入りを裸にし見る相撲哉　三允
鑛山人の相撲へるさまは羅刹かな　俳小星
砂の身を錦に座る相撲かな　雷死久
藪小道相撲と見えて幟かな　木母庭
新蕎麥の草屋泊りや旅角力　笠堂
寢覺よき角力の太鼓聞こえ鳧　梅痩
關となりて故郷近き相撲かな　素泉
黒髪の水々しさよ勝相撲　松濱
小角力や風呂を焚きつゝ思へらく　由人
相撲老いて文かく硯寄せにけり　月舟
負相撲土俵の土に埋れけり　著森
宮角力おろそかならぬ神事哉　伯洲
鬢の毛の亂れもうしや負相撲　西男
宮相撲果てゝ月照る力石　水棹

雨ふるやつり菰濡るゝ相撲小屋　黄村
いつも笑ふ大きな面の相撲哉　柚翁
流れ來てこゝに老けり草相撲　木人
髪の名も櫓落しと關相撲　四子
小葛籠に老行く旅の相撲かな　如雨露
松前に分れて渡る角力かな　玲峰
横綱の藁髻や朝稽古　十歩老
投られて禮いふ稽古相撲かな　案山子
朝風に最負角力の幟かな　江涯
おごそかに初まる御前相撲哉　霞峰
草の日に生々しさや相撲疵　鶯谷樓
寄切つて天地もゆるぐ相撲哉　桂雫
江尻蒲原晴れ打つ角力府中入　不稀翁
草相撲見るや夜露を握る拳　零餘子
ふるさとの山の名つけて角力取　桂花
北面の武士角力けり院の庭　東園

地芝居

地芝居や出代りし子の鏡立　青々
地芝居や尾花がもとの囃し方　同
地芝居に塗る若者や蕎麥の花　同
地芝居は娘の衣を借着かな　一蓑
地芝居の秋やいろ〳〵女形　虚明
地芝居の噂に風呂のさめかゝる　柴人
地芝居の丈長細し草の花　飛雲
地芝居や萩に芒に杭をうつ　來布

初獵

初獵の江を離れずよ晴るゝ日に　碧梧桐
鳴走る田水獵期の初めかな　同
初獵や穂屋の嵐の朝朗　八重櫻
初獵の眼にしたしさや草の花　蛇笏
初獵や泥に塗れし革はゞき　三餘
初獵の嚢佗びしき小鳥かな　冷火

鳩吹

鳩のとぶ方に鳩吹く聲遠し　子規
鳩飛んで鳩吹く聲は止みに鳧　同
鳩吹や寺領の畑の柿林　同
鳩吹くや朝山寒き露葎　初聲

鳩吹や狭霧霽れたる茶の木原　初聲
鳩吹や鳩飛ぶ見ゆる山の畑　同
鳩吹きつゝ日影傳ふや山の鼻　八重櫻
渡り來て鳩吹きをるや島の影　同
裏山や鳩吹く次郎がふくみ聲　松宇
山日和絶へず鳩吹く高音かな　碧童
鳩吹に眞田が宿を尋ねけり　無黃
空き腹を訴へつゝ鳩吹戻り來ぬ　俳小星
鳩吹くや林下に焚かぬ瓦窯　醉佛
鳩吹きの山を遙かに望みけり　寶水
鳩吹くや瀧津瀨之を遮れる　曾左運
鳩吹や日は西に落ち杉の闇　折亭
鳩吹くは誰ぞと醍醐の寺男　鼠骨

鳩笛

鳩笛の遠まさるなり九十九折　初聲
鳩笛と鳩啼くと二つ谺かな　柳雨子

小鳥網

小鳥網葉刈りがてら見張る也　六花
小鳥網片雲江より來たりけり　同
小鳥網藪と藪との間かな　桂華
網掛て間もなく小鳥かゝり鳧　同
蔓珠沙華のゝく野淋しや小鳥網　碧梧桐
小鳥網邪魔な鳴子が隣畑　句佛
さゝやくや小鳥網張る主と從者　塵山
水車守小鳥の網も見張りけり　花浪
網に遠く茱萸に群れつく小鳥哉　百花蓋
柿赤き夕日が丘や小鳥網　芋村
丘上に風見車や小鳥網　象耳
兀山は向ふに高し小鳥網　怪松庵
小鳥網かけて朝日のまたれけり　啞村

さか鳥

蘆を鳴る風にさか鳥待たれけり　碧梧桐
さか鳥や網の放れの空に鳴る　同
さか鳥や山なき國の高櫓　櫻魂子
はぐれ鴨來るさか鳥の明放れ　同
小笹山さかどり打の上りけり　師竹
さか鳥や網を仕舞へば三羽飛ぶ　同

木兎引

木兎引や赤き頭巾の耳が立つ　青々
木兎引や林の中の赤頭巾　同
侮りて木兎に引るゝ小鳥かな　同

虫送

虫送る松明森に隱れけり　子規
火や鐘や遠野小野の虫送　同
送る灯に飛び來る虫の羽音哉　鳴雪
虫送る火一筋に山田かな　八重櫻
虫送鎭守の庭の勢ぞろへ　柳家
虫送る火や川上に稻光り　奇遇
割り當つる松明錢や虫送　田士英
宵闇や虫送る灯に山赤し　桂華
黍の間虫送る火の見えにけり　木兎
此の漁村虫送ることもせざりけり　露華
虫送り村川落つる大河まで　法師
喜雨亭の裏道行くや虫送り　觀魚
先に行く僧が咒文や虫送り　烏犍

駒迎

駒迎見るや埴生の小家の妻　蝶衣
駒迎稻刈る里を通りけり　不羅
駒曳
駒曳や更の草鞋を老の腰　蝶衣
駒曳を泊めたる驛や軒行燈　同
駒曳や秩父が莊の優男　蓬風
駒送
甲斐が嶺を顧りみつゝや駒送　五工
毛見
毛見過ぐと路通起しぬ草枕　鳴雪
寺小姓美にして毛見の給仕かな　同
堰口や毛見を尻目に鰻搔き　同
毛見の駕鎭守の森より見えそめたり　虛子
腫物に障りし毛見も立たれけり　同
毛見の衆に三戸の村の恐れけり　露月
毛見の衆に機を下らぬ寡婦かな　同
毛見の衆に狼出でよ山の村　稻青
灯を乘つて尙ほ毛見するや殘る村　同
毛見もまだ雨じく〳〵と降る日哉　八重櫻
和田恩地毛見の願もなかりけり　同
毛見が召す村の古老三人かな　雉子郎

鷲湖山下豊かに毛見を待ちに鳧　雉子郎
毛見の衆去のともせず娘出ても來ず　皐千里
年々の毛見も半作凹田かな　彩雲
毛見の衆や猪名川下る船に酒　天易兒
棹さして舟人の眼に毛見もなし　蛸魚
毛見濟んで國替の便り聞く日哉　素泉
のそ〳〵と犬が通りぬ毛見の前　菫哉
毛見樣へ誰がわざくれの落首哉　ゆう〳〵
毛見の道牛つなぎたる咎めかな　蝶衣
縣女の毛見の衆とも知らぬなり　波空
黄昏れて毛見の奴の疲れけり　觀山
毛見衆に一語あやまつ僮かな　吐月
草花や毛見にうづくまる小百姓　泊雲
田の畔や毛見につくばふ小百姓　孤村
毛見の衆の野取圖見るや岡の上　柯客
壁越しの毛見に藏打つ女かな　春又春
明日の毛見ふれてあるくや小提灯　鹿語子

案山子

高張に月の薄さや毛見の宿　晩紅
毛見の衆の嘘に散るや稲雀　黄雨
毛見の衆の御意に入りけり境松　午伴
毛見の座や誰が放ちたる放屁蟲　活堂
あるが中に最も愚なる案山子哉　子規
大水を踏みこたへたる案山子哉　同
兼平の塚と案山子の矢先かな　同
御製にも入らで朽ちぬる案山子哉　鳴雪
豆引けば咎め顔なる案山子かな　同
傭兵の制今なくて案山子かな　乙字
村一番大きなる我案山子かな　同
古道に人の見返る案山子かな　蝶衣
ひつくゝりつゝ立てば早案山子哉　同
破れ笠猪首にきたる案山子かな　松濱
鳥居から松に引く緒や釣案山子　同
山畑に起しも立てず案山子かな　鬼城
さや〳〵と野川流るゝ案山子かな　同

豐年の稻に全き案山子かな　虛子
某は雀にて候案山子殿　漱石
太刀佩いて弓持つて正に案山子哉　紅綠
古帽子案山子に着せて了ひけり　無黃
國替を知らず顏なる案山子かな　三允
破案山子二十四輩の姿かな　句佛
粟稗に關屋の跡の案山子かな　霽月
築き上げし稻城にこもる案山子哉　八重櫻
笠なくてまことしからぬ案山子哉　水棹
笠飛んで坊主なりける案山子かな　水巴
かたむきし笠に雨ふる案山子かな　耕村
月に立ちて句吐かぬ君は案山子哉　井泉水
裾落ちて腰のさびしき案山子かな　孤村
雨風に老ひし春戸田の案山子かな　銀波
風あつて袖振る女案山子かな　禽化
案山子の威つゝみて笠の深さかな　濱人
黍の丈押分け額の案山子かな　里石
悠然と南山を見る案山子かな　松堂

鳥威し

人住んで此山かげや鳥威し　大羽
鳥威し廓が見ゆる田甫かな　苔花
燕雀の心を識れり鳥おどし　五車

引板

鳥威したつや棚田の風の秋　柴兮
古膳を引板に造るや老の宿　蝶衣
番小屋や三方引板の綱くばり　法師

鳴子

こちらで引けばあちらでも引くや鳴子繩　子規
小山田に秋をひろげる鳴子かな　同
あれよ〳〵鳴子に鳥の飛ぶ事よ　同
鳴子引く歌も聞えて伊勢路哉　碧梧桐
學僧の往來の道の鳴子かな　同
樽さげて聟が行きやるを鳴る鳴子　同
推せばなる草のとぼそのの鳴子かな　虛子
一つ引け田の面の鳴子なるを見る　同
鳴子引て尙ほうと追ふ鴉かな　同
早稻刈りて片田閑なる鳴子かな　露石